ゴキげんNANAME！

三河　悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゴキげんＮＡＮＡＭＥ！

【Ｎコード】
Ｎ１３７７ＢＡ

【作者名】
三河　悟

【あらすじ】
白髪童顔、女の子みたいな男の子、塔城主人（とうじょうあると）はある日不良に絡まれていた所を、おかしな恰好をした少女に助けられた。「アブソリュート」と名乗るその少女は自らを「異次元から来た異次元人」であるとし、主人にこの世界を守るために戦ってくれないかと持ちかける。右翼曲折あって、主人は渋々ながらその提案を飲んだ。こうして主人は異次元からの侵略者との闘争の日々に身を投じる事となる……。これは大半ギャグ、ちょびっとシリアスな、主人とその仲間達の物語。

開幕宣言（プロローグ）（前書き）

自分の趣味を全開にした小説デス。それでも読みたいと思った人は読んでみてくだサイ。

開幕宣言（プロローグ）

そこには広大な荒野が広がっていた。
全てが瓦礫に埋もれ、あちこちから火の手が上がっている。
この荒野がかつて黄泉市（きせん）という名の町だった頃の面影はもうない。
だがそれはここだけに始まった事ではない。今や全世界がこうなっているのだ。
世界が破滅してから数週間。七月二十五日の今日、全てが終わる。
「そう、全てが終わる」
瓦礫の中にたった一つだけ無事に建っているアパートの一室で、一人の少女が呟いた。
全身が包帯に巻かれた金髪の女の子で、その上からセーラー服を着て、頭には紫色のクモの様なヘルメットを被っている。
彼女の周りには幾多ものコンピュータが立ち並び、膨大な数字の羅列や何かの数値を表している様々な種類のグラフ、そして何かが接近している事を告げるレーダーと警鐘が鳴り響く。
「本部よりレイヴンワン」
少女が無線で誰かへと連絡を取る。
「こちらレイヴンワン、どうした」
無線の向こう側……はるか上空を飛ぶ、幾千もの少年少女達の先頭を切る、リーダーと思われる少女が答えた。
少女は黄色と黒の縞模様のラバースーツとプロテクターで身を固め、頭にはハチを模したヘルメットを被り、背中には透明な翅とブースターパックを背負っている。中には「個性的な格好」をした者もいたが、それ以外の者は全て同じ様な格好をしていて、皆一様に翅は使わず、背中のブーストを使って高速飛行していた。
「動きを察知されたみたいだ。全艦隊がこっちに向かって来てるぜ（え）」
何台ものコンピュータを同時に操作しながら、包帯少女が答える。

レーダーにはいくつもの巨大な丸い艦影がこちらに向かって来ている事が示されていた。
「ウィルスはまだ感染していねぇ。空戦部隊は交戦を控え、待機しなぁ」
「了解！　レイヴンワン、左旋回！」
包帯少女のさらなる指示に、リーダーの少女が体を左方向に旋回し、後続の少年少女達もそれに従う。
「頼むぜぇ、アリュー、バク」
包帯少女がレーダーの一番大きな艦影を見ながら、今はここにいない誰かの名前を呟いた。
ビィービィービィー！
突然、画面から今までとは違う甲高い警鐘が鳴り響く。
驚いた包帯少女がそれを見ると、画面からアナウンスが流れてくる。
『敵本艦より多数の機影の発艦を確認。移動方法、ホバー移動。進行方向、黄泉市』
「ちっ！」
包帯少女は苦々しく舌打ちして、無線を繋いだ。
「こちら作戦本部、陸戦部隊応答しやがれ！」
「こちら陸戦部隊、どうした」
先ほどのリーダーの少女とは別の少女の声が無線の向こうから聞こえる。
「奴ら陸戦部隊を先遣隊として送り込んできやがった！　見えるか？」
「ああ……」
無線の向こう側……かつて高層ビルの立ち並ぶ黄泉市の中心部だった更地にいる少女が答えた。
少女はプロテクターの付いた黒いライダースーツに身を包み、頭には赤いアイシールド付の骸骨を模したヘルメットを被り、口元には黒いマスクを着け、首には黒いマフラーを巻いている。

その少女の見つめる先には海が見えた。
ここがかつての黄泉市であれば高層ビルが立ち並んでいるので、海岸部の方は全く見えないのだが、今は瓦礫すらない更地になっているので、内陸であるここからでも海が見えるのだ。
そして海の遥か彼方に、いくつもの巨大な影が見えた。
それらは目を凝らして見ると巨大な円盤軍で、大きさは目測ではあるが、一つの直径は五十キロメートルを超え、円盤軍の中心にいる司令艦と思われる円盤に至っては、二百キロメートルもある。
形は全て平べったい円形で、側面からはソーラーパネルの様な板が何本も生えている。さらに円盤の周囲は薄くて黒い膜の様な物で覆われていて、真上から見るとちょうど真っ黒な太陽のマークに見えた。
そして巨大な司令艦の下部から何か黒い塊が射出された。それは海面に着水すると同時にアリの姿に変形し、海面を滑るようにこちらに向かって疾走してくる。
「来るぞ！　全員戦闘準備！」
ラバースーツの少女が後ろに向かって力強く叫んだ。
少女の後ろには、同じくライダースーツに身を包んだ黒子達が、槍や剣等の武器を手に持ち大勢並んでいる。ただしヘルメットは白ではなく黒で、マフラーも巻いていないので、少女との違いははっきりとした。黒子達はヘルメットのせいで顔が見えないが、全員がこれから始まる激戦に向けて奮い立っているのはバシバシと伝わってくる。
「始まった」
ライダースーツの少女が前方に視線を移と、そこには上陸して猛進する巨大なアリがいた。そのアリはライダースーツの少女と黒子達から五キロメートル程手前で止まると砂のように崩れ、その一帯を真っ黒に染める。
そしてその真黒な絨毯がボコボコと膨らみ始め、その膨らみは形を変えやがて無数の怪物の姿になった。怪物は古代エジプトのアヌ

ビスの様な半人半獣の姿をしていて、頭には歪曲した巨大な角が生え、手には剣や槍、斧に棍棒等の武器を持っている。それはまさしく悪魔の軍隊と呼ぶに相応しかった。
無数に出現した悪魔の軍隊は鋭い目付きでライダースーツの少女と黒子達を睨みつける。
「行くゾォォォォォォォォォォォォォオオオ！」
ライダースーツの少女が剣を空へと掲げて開戦の雄叫びを上げ、
「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」」」」」
後ろの黒子達もそれに応え、一斉に手にする武器を空に掲げる。
『目の前の獲物を狩り尽くせぇぇぇぇぇぇ！』
ライダースーツの少女と黒子達に呼応する様に、軍隊のリーダーと思われる個体が応戦の咆哮を上げ、
「グオォグオォ！　グオォグオォ！　グオォグオォ！　グオォグオォ！　グオォグオォ！」
他の悪魔達も連動して一斉に咆哮した。
「全軍、前進！」
「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」」」」
ライダースーツの少女が駆けだし、黒子達が後に続く。
「グゥオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」
それを見た悪魔達も進軍を始めた。
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」
「グゥオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
両者はまるで黒い洪水の様に押し寄せ、
『ガキガキガキィイイン！』
互いに激しくぶつかり合う。
「くそ！」
その様子をモニター画面で見ていた包帯少女が悪態をついた。そして一つの画面を食い入るように見る。

『ウィルス感染率ゼロパーセント』
画面にはそう書いてあった。
「まだか、まだなのか！」
包帯少女は拳を握り締め、焦りの表情を浮かべる。
と、その時。
『ウィルス感染開始。感染率六パーセント……』
画面が切り替わり、アナウンスが流れた。
「よっしゃあ！」
アナウンスを聞いた包帯少女はガッツポーズを取り、空戦部隊へと無線を繋げる。
「こちら本部！　レイヴンワン！　アリュー達がやりやがった！　現在敵メインシステムにウィルス感染中！　空戦部隊は攻撃態勢に入れ！」
「了解！　全機、攻撃用意！」
「「「「了解（ラジャー）！」」」」
連絡を受け取ったリーダーの少女の叫びに後続の少年少女達が答え、皆一斉に何処からか槍を取り出した。槍は彼女達の伸長と同じ位の長大な物で、先端には五本の棘の生えた刃が付いている。
「見えた！」
リーダーの少女が叫んだ。
少女達の遥か先の海に巨大な円盤軍が見える。
「それだけじゃないぜ」
少女の後ろから、サメの様な黒い装甲で覆われた男が話しかけてきた。彼は先に出てきた「個性的な格好」の者である。
「下見てみな」
サメ型の男に下を見るように促され、リーダーの少女が下を見ると、町の中心部にあたる更地でライダースーツの少女達の陸戦部隊と敵の悪魔の軍隊が黒い荒波となって激しく戦っていた。
「……ウィルスの感染率は！」
リーダーの少女が本部の包帯少女に向かって叫ぶ。

「今の感染率は九十……九十一……九十二……」
包帯少女は緊張気味にカウントしていき、そして
「……九十八……九十九……百パーセント！　敵バリアシステムの掌握を完了！」
包帯少女が会心の叫びを上げた。同時に、円盤軍を覆っていた黒い膜にノイズが走る。
「了解！」
リーダーの少女は包帯少女からの知らせに応え、その手に持つ長大な槍を巨大な司令艦へと向けた。そして彼女のヘルメットのアイシールドにロックオンのマークが浮かび上がる。
「レイヴンワン、フォックス・ツー！」
その叫びと共に、槍の先端の五本の棘の中で一番大きな棘がミサイルの様に射出された。発射された棘の後ろ側にはブースターが付いていて、大量の排気煙を出しながら司令艦へ一直線に飛んでいく。
「行け、行け、行け……」
棘……いや、ミサイルと司令官との距離はどんどん縮んでいき、そして……
「行けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
ズガアァァアアン！
ノイズ交じりの膜を貫いて、ミサイルが司令艦の側面に着弾した。外壁の一部が砕け散り、火の手が上がる。
その瞬間、
「「「「イエェェェ！」
空で、本部で少年少女達が喜びの歓声を上げた。
そして本部の包帯少女が次の指令を出す。
「よぉっし！　攻撃開始しろ！」
「了解！　各自照準を合わせろ！　全機攻撃開始！」
指令を受けたリーダーの少女が他の少年少女達に攻撃命令を下した。
「レイヴンツー、ロックオン！」

「レイヴンセブン、ロックオン！」
各機とも次々に円盤軍へと照準を合わせる。
「レイヴンワン、フォックス・ツー！」
「レイヴンゼロ、フォックス・ツー！」
全員がほぼ同時にミサイルを発射した。無数のミサイルが津波のごとく一斉に円盤軍に襲い掛かる。
ドォンドォンドォオオオオン！
ミサイルが着弾し、円盤軍の外壁が次々に砕け散った。だがその大きさ故か、墜落するものはいない。
「！」
火の手が上がる中、円盤の外壁に割れ目ができ、そこから無数の悪魔が湧き出てきた。
悪魔は金色のサメの様な装甲で覆われていて、背中には透明な翅が生え、手には巨大なダブルランスを持っている。
「本艦、ステルス解除！」
金色の濁流の様に迫り来る無数の悪魔を見たリーダーの少女が、後ろに向かって叫んだ。
すると、空戦部隊のすぐ後ろから突如として沢山の円盤が出現した。敵の円盤軍と違って色が白く、形も円形ではなく正六角形をしている。
「今だ、撃てぇ！」
リーダーの少女の叫びと共に、味方の円盤軍からホーミングレーザーがシャワーの様に放たれた。
ズガァァァァァァァァ！
ホーミングレーザーが当たり、無数の悪魔といくつかの円盤が撃墜され、海へと落ちていく。
「グォアアアアアアアアアア！」
だが悪魔はまだまだいる様で、さらに大量の悪魔達が空戦部隊へと突撃してきた。悪魔がランスを空戦部隊に向けると先端から光弾が発射され、無数の光弾が吹雪の様に空戦部隊に襲い掛かる。

「敵の迎撃部隊だ！　各自ブーストを解除して交戦体勢に入れ！」
リーダーの少女の声が響き、他の空戦部隊はそれに従いブースターの噴出を止め、代わりに今まで使っていなかった翅を使って飛行し、迫り来る光弾の吹雪を柔軟な動きで回避した。
「撃ち落とせぇぇぇえ！」
リーダーの少女は攻撃を回避しながら一体の悪魔に狙いを付け、刃先の両脇にある四本の棘の内の一本を発射する。それは見事に悪魔に命中し、爆散させた。
そしてリーダーの攻撃を皮切りに、激しい空中戦が開始される。
「……始まったようだな」
その様子をモニター越しに見詰める影があった。暗がりにいるので、シルエットしか分からない。
ここは敵円盤軍の司令艦の中。硬質感のある外壁とは違い、壁全体が蠢く生き物の様な内壁だ。
「だが、無駄な足掻きだぜぇ、静奈」
暗がりにいた影が明るい場所に移動してきた。それによって、影の姿がはっきりと見える。
黒いロングヘアーに黒いロングコートを着た黒づくめの少年で、その他の衣類も黒なのだが、何故か頭に巻くバンダナは真っ赤である。目の下に隈が寄った三白眼に裂けた口という凶相で、表現するなら鬼や悪魔の様な顔だった。
「お前に救えるモノなんて何もない。この世界も、あのゴミ虫共も」
真っ黒な少年は歪な笑顔を作りながら、一歩、また一歩とゆっくりと前に進む。そして急に立ち止まると、自分の目の前に向かって指差した。
「お前自身もな」
「……」
真っ黒な少年の指差す先には人が一人佇んでいた。
雪のように真っ白な髪と肌、血のように真っ赤な瞳を持つ少女で、帽子の付いたセーターと水色のミニスカートを穿(は)いている。

真っ白な少女はしばらく黙っていたが、やがて吹っ切れた様な笑顔になり、
「……私は世界を救おうとか、そんな大それた事は考えてないよ。私が守りたいのは……救いたいのは、私が住むこの町とあの子達、そして……」
自分の正面に立つ真っ黒な少年を指差し、
「主人（あると）、あんたをね！」
「ぷっ！」
アハハハハハハハハと、少年は大笑いした。
「お前、馬鹿か？　この期に及んでまだそんな事言ってんのかよ」
「私は馬鹿じゃないし、いつだって本気よ。そのために外でも、中でも皆頑張っているわ」
真っ白な少女の言う通り、この司令艦の内部のあちこちで様々な恰好をした少年少女が戦いを繰り広げている。
黒いワンピースの女の子、白いオーバーオールの男の子、ピエロの格好をした女の子、掌サイズのメイド服を着た女の子、ひよこの着ぐるみを着た女の子、チャイナ風のボンテージ服の女の子、囚人服の様なタイツ姿の女の子、マジシャンの格好の青年、カーボーイ風の女の子、プラグスーツのコスプレ服を着た女の子、全裸に蛇を巻いたエロい女性、フードにウサ耳付けた女の子、フラメンコ風の女の子、ゴスロリファッションの女の子、ヒーロー戦隊の様な変な格好をした男の子、赤い仮面を付けた男の子、ガチャピンみたいな格好の女の子……それぞれ格好も性格も全く違うが、目的は皆同じだった。
「そう、皆『日常』を守るために戦っている」
真っ白な少女が今も戦う少年少女の気持ちを代弁する。
「ハッ！　無駄だよ、無駄」
そんな真っ白な少女の言葉を真っ黒な少年は真っ向から否定した。
「俺がぜぇんぶ壊してやる！　世界も、あのゴミ虫共も、そしてお前もなぁ！」

そして歓喜の表情で叫ぶ。
「全ての人類を討ち滅ぼすのだぁぁぁあああああ！」
「させない！」
真っ白な少女が力強く真っ黒な少年の言葉を否定し返した。
「必ず皆を、そしてあんたを救ってみせる！」
「下らねえぇぇんだよぉおおおおおおおおおお！」
真っ黒な少年が大気を震わせる程の叫び声を上げる。
すると、真っ黒な少年の胸元が輝きだした。
そこには黒い勾玉の様な石があり、そこから黒い靄（もや）の様な物が噴き出し、真っ黒な少年を包み込む。そして靄が晴れるとそこに真っ黒な少年の姿はなく、代わりに別の「モノ」が立っていた。
それは漆黒の西洋風の甲冑に身を包み、黒いマフラーとマントを羽織っていて、手には身の丈を超す程の巨大な大鎌を持っている。その姿は悪魔の騎士と呼ぶに相応しかった。
それに応える様に、真っ白な少女の胸元が輝きだす。
そこには真っ黒な少年とは違った形の白い勾玉があり、そこから光の粒子が溢れ出て、真っ白な少女を包み込んだ。そしてその中から新たな戦士が誕生する。
その戦士は銀白のヴァルキリースーツに身を包み、背中から真っ白な翅を生やした、純白の天使の姿をしていた。その手には西洋風にアレンジした薙刀が握られていて、純白天使はそれを悪魔騎士へと真っ直ぐに向ける。
純白天使と悪魔騎士はしばらく睨み合った後、
「はあああああああああああ！」
「ヒャッハアアアアアアアア！」
二人同時に駆けだし、激突した。
火花を散らしながらぶつかり合う中、二人は考えていた。
どうしてこうなってしまったのかを。
……それはこれから始まる、とある少年と少女の物語によって紡がれる。

開幕宣言（プロローグ）（後書き）

プロローグなのにいきなり世界崩壊から始まるというとんでもない内容でスガ、この場面は次回から始まる本編の中でいずれ出てきマス。興味のある方は読んでくだサイ。

一期一会（前書き）

文字通り物語の始まりとなる話デス。どうぞお楽しみくだサイ。

一期一会

とある地域にある町、黄泉(きせん)市。
上から見ると丁度三角形に見えるので、「陸の魔のトライアングル」などとも呼ばれる。
町は巨大なビルがジャングルのように建ち並ぶ中心部と、閑散とした郊外とに分かれている。周囲は山で囲まれ、東側は海に面して農家や漁業を営む人達もいる、自然と人とが共存した美しい町だ。
その郊外の一角にある小さな二階建てのアパート『月光荘』。
そこがこの僕、塔城主人(とうじょうあると)の家である。
だが別に部屋を借りて住んでいる訳ではない。僕はここ『月光荘』の大家、塔城岬(みさき)の一人息子というだけの事だ。
さて、僕は今何をしているのかと言うと、ラッピングされた週刊誌を開けているところだ。
今これを読んでいる老若男女、紳士淑女の皆様は何を意味分からない事しているんだこいつ、と言いたいところだろうが、それが僕の朝の仕事なのだから仕方ない。
『月光荘』は二階が借家、一階が僕と母さんの住む自宅となっているのだが、一階には他にも母さんが経営する小さな本屋『月明(つきあかり)書店』があり、僕は毎朝そこの手伝いをしているのだ。
『月明書店』の内装は一般的な書店と大体同じで、入り口を入ってすぐ目の前に週刊雑誌コーナー、右側にレジカウンター、左側に幾つかの文房具コーナーがあり、その奥にはコミックや小説などの本棚が並んでいる。明るく朗らかとした雰囲気の店だ。
「母さん、終わったよー！」
僕は週刊誌を出し終え雑誌コーナーに積み上げると、文房具コーナーに向けて叫んだ。すると文房具コーナーから僕の母、塔城岬が顔を出す。
蒼い瞳に綺麗な金髪を持つ美女で、それをポニーテールにしてま

とめている。服装はチェックのワイシャツに紺のジーンズ、『月明書店』と書かれたエプロンという、いかにも個人経営の店と言った格好だ。ただ、胸は常識外れに大きいので結構きつそうであるが。

「あんがとー、あとごみ捨てもしといて。ゴミは家の玄関に置いてあるから」

母さんは手をひらひら振りつつそれだけ言うと、また文房具コーナーに戻って行った。恐らくまだ品出しの途中なのだろう。

「わかった。じゃあ、行ってきます」

文房具コーナーから行ってらっしゃーいという母さんの声を確認すると、僕はレジの方に向かった。レジには一枚の扉があり、開けると何足かの靴と靴箱、二つのゴミ袋が見えた。実は自宅と『月明書店』は玄関で繋がっており、この扉はその出入り口なのだ。

僕は一旦自分の部屋に戻って制服に着替え、ゴミ袋を家の前に止めてある通学用のママチャリのハンドルにぶら下げ、自転車を押し始めた。

さて、僕がこれからどこに行くのかと言うと、町の中心部にある学校に行くのである。

言っていなかったが、僕は『私立月陰（つきかげ）高校』に通う現役高校生なのだ。

「すいません！」

僕がしばらく歩いていると、通りの角から男の子が一人出てきた。

男の子は僕に一枚の手紙を差し出すと、勢いよく頭を下げ、

「前から貴方の事が好きでした！　付き合ってください！」

唐突に愛の告白をしてきた。

「ぜひ、それを読んでください！」

男の子があまりに強く勧めてくるので、僕は渋々その手紙を読んだ。内容はプライバシー保護の観点からはっきりとは明かせないが、要は「貴方の事がいつも気になっていて、遂に今日告白する事にしました」的な事が書いてある。制服がウチの学校の物とは違うので近くの学校の生徒だと思われるが、一体いつ僕の事を見ていたのだ

ろうか。
　それはそれとして、彼の熱烈な告白に対する僕の答えは決まっている。
「すいません、僕「男」なんですけど」
「！」
　男の子は驚愕の表情を浮かべ、
「マドモワゼェェル！」
　変な叫び声を上げながら何処かに走り去っていった。
　そう、腰まで伸びた白銀の髪に童顔のせいでよく間違えられるが、僕は列記とした男の子である。断じて“僕っ娘”ではない。
　しかし、初対面の人は必ずと言っていい程僕を女の子に間違える。さっきの哀れな男の子のように熱烈な告白をしては散っていく人もかなりいた。きちんと男子用の制服を着ているし、私服も男の子向けの物にしているというのに、これは一体どういう事なのだろうか。
　まあ、今更と言えば今更なのだが。
　それよりも今はゴミ捨てて早く学校に行かなければ。
　『月陰高校』は町の中心部にあり、結構距離がある。さっきの騒動のせいでかなり時間を喰ってしまったので、今からだとギリギリだ。急がないと間に合わない。僕は少し早歩きでゴミ捨て場へと向かう。
「！」
　だがそうは問屋が卸さなかった。
　さっきの騒動から数分、やっとこさゴミ捨て場の前に着くと、そこに三人の不良がいたのだ。
　スキンヘッドの巨漢と、金髪でオールバックのニヒルと、背が一番低い熱血系馬鹿の三人組で、暇そうに煙草をふかしながらう〇こ座りしている。
「あん？」
　熱血系馬鹿が僕に気付くと、ズカズカと近づいてきた。
「おうおう、嬢ちゃんよ、朝からこんな所で何してんだぁ？」

自分より背の低い奴に嬢ちゃん呼ばわりされたくないし、ゴミ袋ハンドルに下げてんだからそれくらい分かるだろう、と言いたい所だったが、不良三人を前にそんなふてぶてしい事言えるはずもないので、僕は黙ったままである。

そんな態度が気に入らないのか、熱血系馬鹿は更に絡んできた。

「おいおい、黙ってちゃ分かんねぇだろ？　ここらは俺らの溜り場なんだよ。そこに勝手に入って来られちまうと困るんだよなぁ」

いつからこのゴミ捨て場はお前らの溜り場になったんだ、それにゴミ捨て場に屯(たむろ)っているってお前らハエか、と突っ込みたくなったが、やっぱり言えるはずもないので僕は黙った。

「やめとけよ、竜馬(りょうま)。その娘はここにごみを捨てに来ただけだ。咎めるほどの事じゃねぇよ」

金髪ニヒルが僕にしつこく絡む熱血系馬鹿……竜馬という男を制した。どうやら竜馬よりは頭が回る（当たり前の事しか言っていないが）ようだ。

「でもよぉ、隼人(はやと)」

竜馬は金髪ニヒル……隼人という男に食い下がった。一体何故そこまでこのゴミ捨て場に拘るんだこの馬鹿は。ゴミ捨て場だぞ、ゴミ捨て場。せめて公園のベンチとかにしておけよ。

隼人はあっはっはっはと笑い、仕方がないといったポーズを取る。

「別にゴミならいくらでも捨ててかまわねぇし、この道を通っても何の問題もねぇよ。通行料と、ゴミ捨て料さえ払ってくれたらな。そうだろ？　武蔵(むさし)」

「大雪山おろし」

隼人の言葉に、スキンヘッドの巨漢……武蔵という男が自信満々に答えた。いや、意味分からん。

とにかくこの三人、僕にたかりをしたいらしい。しかし通行料ならまだしもゴミ捨て料というのはいかがなものだろう。まあ、金を巻き上げる理由なんて、適当なものでいいのだろうが。

だがこのまま話が進めば僕は確実に通行料とゴミ捨て料とやらを

取られてしまう。
一目散に逃げ去りたい所だが、この大荷物では素早く動けないし、ゴミ袋ならまだしも鞄や自転車は置いていく訳にもいかない。ここから徒歩で学校に行くのは正直きつい。しかし何もしなければ金を巻き上げられる……。
結局堂々巡りしているだけで、僕は突っ立ったままだった。
そんな僕に、不良三人組が若干下心のある手つきで迫って来る。そう言えば、竜馬が「嬢ちゃん」って言っていたな。
つまり僕はまた女の子に間違えられているらしい。隼人が不良の割りに嫌に穏便な態度だと思ったら、そういう事か。これで僕が男だと分かったら、一体どうなってしまうのだろう。とんでもない修羅場しか思い浮かばない……。
と、その時、
「待つアル！」
どこからか女の子の声が聞こえ、
「とりゃあ！」
ゴミ捨て場のゴミ袋の山の中から、女の子が飛び出してきた。
「とう！」
女の子はその勢いのまま空高く飛び上がると、くるくる宙返りしながら、僕と不良三人組の間に割って入るように着地する。それによって、僕はその姿をまじまじと見る事ができた。
年の頃は十二、三才、ピンク色の髪に赤い瞳を持つ褐色肌の女の子で、身体のいたる所に鮫のエラのような黒い模様があり、スカートの裾がギザギザしてお尻に二本の飾りの付いた黒いノースリーブのワンピースと黒いスニーカーを履き、手首と足首には赤いリング、背中には黒と透明の虫の翅のような飾り、頭には耳飾りの付いた大きな黒い帽子を被っている。
少し、いや、かなり変わった女の子だ。この娘一体何なのだろうか。
「ふぅ……」

着地してから数秒後、女の子はゆっくりと立ち上がると不良三人組の方を指差し、
「やい、不良共！　こんなか弱い女の子からお金を巻き上げようとするとは、外道にも程があるネ！　弱い者イジメはこのアブソリュートが許さないアル！」
堂々かつ熱血的な自己紹介をした。
そうか、この娘アブソリュートって言うのか。
でもこの局面でそんな挑発的な自己紹介をしては駄目だろう。
「あぁ！？　あンだと、このクソガキ！」
「子供と言えど、その態度は許せんなぁ！」
「ゲッターミサイル」
案の定挑発に乗った不良三人組が、怒り心頭といった感じでアブソリュートに殴り掛かった。
しかしながら、小学校高学年位の子供の挑発に乗ってしまうこいつらの方がよっぽど子供である。どんだけ短気なんだこいつら。
と、そんな事している場合じゃなかった。
どんなに大見得切った所で、アブソリュートは子供、高校生三人掛かりが相手では結果は見えている。早く止めないと大変な事になるだろう。
「ちょっと、君らそんな子供に……」
僕は慌てて止めに入ったが（下らない一人突っ込みしていたせいで）一歩遅く、既に不良三人組の拳はアブソリュートに向けて放たれていた。
その拳は幼げなアブソリュートの顔目掛けて真っ直ぐに向かい、
「！」「！」「！」
何にも当たらずに空を切る。
不良三人組の拳が当たろうかというその瞬間、目の前にいたアブソリュートの姿が忽然と消えたのだ。
「一体何処へ……」
僕も、そして不良三人組も揃って辺りを見回す。

すると、上からあっはっはっはという不敵な高笑いが聞こえてきたので空を見上げると、高さ三十メートル程の上空でアブソリュートが「飛んで」いた。
「跳んでいる」ではなく「飛んでいる」である。
いや、前者でも充分おかしいが、アブソリュートはそれを上回る後者の方を体現していた。
そう、彼女は飛んでいるのだ。背中にある翅を使って。
あれ、飾りじゃなかったのか。
「この私にまで襲い掛かって来るとは、女の敵め。お前らにはちょっときつーいお灸を据えてやるアル！」
そう叫ぶや否やアブソリュートは不良三人組目掛けて一気に急降下した。
「う、うおおおお！」
余りの出来事に唖然としていた不良三人組だったが、アブソリュートの急接近にようやく我に返り、まずは竜馬が反撃の拳を繰り出す。
だがその攻撃はアブソリュートが飛ぶ方向を変えた事でまたも空を切り、彼女はそのまま塀に着地すると……シャカシャカと塀を高速で這いずり回った。
「「「「キモい！！」」」」
僕と不良三人組は声を揃えて叫ぶ。
女の子にそんな事を言うのは失礼かもしれないが、空をパタパタ飛ばれたり、壁を這いずり回られたりされたら誰しもがそう言うだろう。他にどう言えと言うのだ。
「はっ！」
アブソリュートは不良三人組を翻弄するように這い回った後、突如として壁から飛び跳ね三人の背後に着地する。
「しまった！」
三人の内、竜馬だけが反応することができたが、もう遅い。
すっかり隙だらけとなった三人の背後に立つアブソリュートは、

その背中に向けて勢い良く飛び上がり、続けて体を捻りながら三人の後頭部に空中回し蹴りを喰らわせた。
「がっ……」「ぐっ……」「ミサイルストーム……」
三人はそれぞれ思い思いの声を上げながら、その場に崩れ落ちていく。
「ふっはっはっはっは！　正義は勝つ！」
三人が倒れ伏す中で、アブソリュートが勝利のガッツポーズを取った。僕はそんな彼女を呆然としたまま見つめる。
彼女は本当に一体何者なのだろう。
目視できない程の速さで動き、翅を使って空を飛び、掴まる所など何処にもない垂直な壁を手足を使って這いずり回り、不意打ちとはいえ高校生三人を一撃で昏倒させるその身体能力は、人間のものではない。
人間のものではない？
では一体「何」のものだと言うのだ。
「おい、お前」
黙ったまま突っ立ている僕に、アブソリュートが話しかけてくる。
「……」
僕がそれでも黙っていると、彼女はスタスタと近づいてきて僕の体中を撫でる様に触りまくった。まずは精一杯背伸びして顔を、次に腕、胸元、お腹、そして……。
「！　な、何を？」
そこまで来てハッと我に返った僕は勢いよく後ろへと下がり、彼女の魔手から逃れた。心臓が激しく動悸（どうき）し、顔が一気に紅潮する。
何だこれ？　何なんだこれ！？
「怪我はないみたいアルネ」
良かったアル、とアブソリュートは満面の笑顔でそう言った。どうやら彼女は僕が怪我をしていないかどうか見てくれたらしい。
それはありがたい話だが、体中を触るのは止めてもらいたい。これでも僕、男の子なので。

「……き、君は……」
未だに動悸し続ける心臓を必死に宥(なだ)めながら、僕はアブソリュートに尋ねる。
「君は一体……何なんだ？」
助けてくれた恩人にそんな事を聞くのは失礼に値するかもしれないが、僕は聞かずにはいられなかった。
彼女は人間ではないかもしれない。
ならば彼女は一体「何」なのか。
僕はそれが気になって仕方なかったのだ。
「あっはっはっはっは！」
するとアブソリュートは高らかに笑い、腰に手を当てて胸を張った。その姿は友達に自慢話をする小学生の様にも見える。
そして彼女はよくぞ聞いてくれたと言わんばかりの自信たっぷりの笑顔で、
「私の名前はアブソリュート。異次元世界『デルタ界』から来た「異次元人」アル！」
堂々とそう言い切った。

一期一会（後書き）

何処かで聞いた事ある生の人物が出てきまスガ、気にした負けデス。
次回はちゃんとした『敵』が現れマス。それでは皆様、次回お会い
しましょウ。

一新紀元（前書き）

サブタイトルは何かが終わり何かが始まるという意味デ、このお話はまさしくそんな感じデス。ぜひ楽しんでくだサイ。

一新紀元

「つまり君は異次元世界『デルタ界』から来た異次元人で、悪い考えを持った異次元人がこの世界を侵略しようとしているから、君はその悪い奴らからこの世界を守るためにここにいるって訳だ」
「うん！　そうアルそうアル！　物分かりがいいアルナ、お前！」
僕の質問に自称異次元人、アブソリュートが答えた。
いや、意味分からん。
いきなりそんな超常設定の説明されても、こっちは困るだけだ。
確かに空を飛んだり、壁を這いずり回ったり、目視できない程の俊足を発揮したりと、彼女が垣間見せたその身体能力は人外レベルであるが、「異次元から侵略の魔の手が伸びている」などというB級映画みたいな設定を素直に受け入れられる程、僕は純朴で純粋な夢と希望に溢れる青少年ではない。どちらかと言うとかなりネガティブな方だ。
頼む相手を間違えてるんじゃないか？
だからと言って子供相手に無下な態度であしらうのも芸がない。
僕ももう高校生だ、ここは少しばかり大人の対応と言うのを試してみよう。
「どうして君はこの世界を守ろうと思ったんだい？　アブソリュートちゃん」
「うん？　私の事は「アリュー」でいいアルヨ」
いきなりニックネームが解禁された。
何たるフレンドリー。しんのすけかお前は。
「それで、どうしてそう思ったんだい？　アリューちゃん」
さあ、僕の生まれて初めての大人っぽい対応へのアリューの返事は、
「……」
沈黙だった。

いやいや、黙られては何も分からないし、僕の猜疑心が深まるばかりなんだが。
しかしここで、
「黙っていちゃ分からないだろう。言いたい事ははっきり言いなさい」
なんて問詰める様な言い方してしたら、ますます黙り込んでしまうだろう。
さて、どうしたものか……。
「……実は」
すると、黙っていたアリューが自分から口を開いた。
やれやれ、とりあえずこれで間が持ったな……。
と、思ったその時、
「あのー！」
誰かに呼びかけられた。
前を見ると、手にゴミ袋を下げた妙齢の女性が、僕に向かって手を振っている。女性はそのまま僕の方に向かって小走りで近づいてきた。僕は足を止めてそれを待つ。
「すいません、ゴミ収集車ってまだ来てませんよね？」
女性は少し息を切らせながら質問してきた。
どうやらこの女性、ゴミ捨てに出てくる時間が少し遅れてしまったらしい。そこでゴミ捨て場の方から来た僕に確認を取ったという訳だ。
「ええ、僕もさっき捨ててきたばかりですし、多分まだ来ていないと思いますよ」
僕は懇切丁寧に答えた。
ゴミ捨て場にはまだ不良という名のゴミが打ち捨てられているような気がするが、『ただの屍の様だ』状態だから気にしなくてもいいか。例え目を覚ましても戦う気力などないだろう。
それは聞いた女性はお礼を言って僕の横を通り過ぎ、僕も前に向き直り歩き始めようとした。

したのだが。
「危ないアルゥゥウウ！」
突如アリューにタックルで吹き飛ばされた。
僕とアリューは自転車を置き去りにして少しの間地面をゴロゴロ転がり、塀にぶつかった所でどうにか止まる。塀はコンクリートなのでかなり痛い。
「危ない所だったアルネ！」
僕の上にのしかかったままのアリューは堂々とそんな事を言ってのけた。
怒っていい？　ここは怒っていいよね？
「危険なのは君の方だろう！　今の何処に危険な要素があったんだよ！」
「なら後ろ見るアル、後ろ！」
怒り心頭の僕に対しアリューは謝りもせず、自分の後ろを指差すばかりである。
本気でブン殴ろうかな、と思いつつアリューの言う通り彼女の後ろ側に目をやると、
「な……？」
そこには“僕の自転車を地面に「串刺し」にした”、妙齢の女性が立っていた。
「串刺し」と言うのは比喩でも何でもなく、女性の片腕が槍の様に変化し、文字通り腕で自転車を地面に串刺しにしていたのだ。
「何だ、何なんだアレ……」
頭の中が酷く混乱している。
僕は女性と他愛もない会話して、別れの挨拶を交わした。
だが次の瞬間にアリューに吹っ飛ばされ、そして僕の立っていた所に自転車を串刺しにした女性が立っている。
全く持ってして訳が分からない。
ただ一つだけ分かっている事は、こうしてアリューに吹っ飛ばされていなければ、あの自転車の代わりに僕が標本の様に串刺しにな

っていたという事だ。
昆虫標本ならぬ人体標本。
別れの挨拶が遺言になる所だった。
『あんたぁ！　何で私の邪魔するのよ！』
女性が正体不明の言語で怒鳴りつける。
何を言っているのかはさっぱり分からないが、雰囲気から言ってかなりの勢いで怒っているようだ。
もう、訳が分からないよ。
『知るかぁ！　私にも分からないアル！』
すると、アリューも女性に対して正体不明の言語で怒鳴り返した。
「え？　君、あの人が何を言っているのか分かるの？」
「うん」
どうやら彼女はあの女性と意思疎通ができるらしい。
なら聞いておくべき事があるだろう。
「あの人は……アレは一体「何」なんだ？」
「アレは「神（アバター）」。さっき言った悪い異次元人アル」
あの話本当だったのか。
今更ながら、やっと信じる事ができそうである。
『あんたまさか……』
女性は苦々しい顔でアリューを睨みつける。そして、
『ならあんたは「敵」だ！　その人間共々ブッ殺してやるわ！』
女性の体に変化が起き始めた。
背中からさっき僕の自転車を串刺しにした槍の様な細長い脚が二本生え、残っていた腕と脚も同じく槍の形に変わり、体が長く棒状に伸び、顔がスライムの如くグニャグニャと様変わりしていく。
そして気が付くと、さっきまで人間の女性だったそれは、異形の化け物に変わっていた。
迷彩模様の装甲に覆われた細長い身体の化け物で、そこからカメラの三脚のような六本の異常に長い脚を生やし、亀の甲羅のような物で覆われた頭部には鋭い牙の生える裂けた口があり、その口内に

は赤く光り輝く光球がある。

ーーーーーー『#002：Avatar（アバター）・The（ザ）・Helium（ヘリウム）』ーーーーーー

「ヒュリリリリリリリリリリリリリリリリ！」

化け物が大気を凍り付かせる様な冷たく恐ろしい叫び声を上げた。

「な、何だよ、あの化け物」

何とか立ち上がった僕だったが、その叫び声で再び腰を抜かす。

「あれが「神」の本来の姿アル」

一方のアリューは目の前の異常事態がさも当然の事象とでも言わんばかりの平然とした態度で、化け物……いや、「神」を指差した。

「「神」は普段はさっきみたいに擬態して社会に紛れているネ。そして獲物を襲う時や外敵に出くわした時に本性を現すアル」

異次元“人”と言うからてっきり人型をしているのかと思っていたが、どうやらそれはとんだ思い違い、勘違いだったらしい。

「それにしても「擬態」って、まるでカメレオンか何かみたいだな……」

「いや、あれはカメレオンじゃなくて「昆虫」アル」

僕のふとした疑問に、アリューが律儀に答えてくれた。

「ええ！？　あれ、昆虫（むし）なの？」

「そうアル。私達『デルタ界』の住人は“自分の肉体”と言うものを持たない、精神だけの生き物アル。だから侵略する時はその世界の生き物に取憑いて、その身体を自分のものにするアルヨ。この世界だとその「器」に選ばれたのが昆虫だったって事アルネ」

つまり、アリューやあの「神」の身体は、元々は昆虫を乗っ取ったものって事か。

「因みにあの「神」が憑依してるのは「ナナフシ」と言う昆虫アル」

「ナナフシ！？」

確かに言われてみると、棒のように長い体とコンパスの様な細長

い脚を持つその姿は、頑張ればナナフシに見えなくもない。でも、原型失い過ぎだろう、アレ。

「ヒュリリリリリリリリリリリリリリ！」

ボッ！

突如「神」が口から赤ん坊程の大きさの木の種の様な物を吐き出してきた。

「おっと！」

するとそれに合わせてアリューも動き出す。

まずスカートの二本の飾りが爆ぜ飛びアリューがそれを掴むと、一瞬にして形を変えて黒く巨大な二本の槍になり、アリューはその二本の柄の部分を接合しデュアルランサーに変えた。

それと同時にアリューにも変化が起き始める。

帽子の耳飾りが蝙蝠の羽に変わり、目付きは鋭くなり瞳も金色に変色し、手の爪は獣のように鋭く伸び、靴にも三本の爪が生えた。

その姿はまるで漫画に出てくる小悪魔の様である。

「せい！」

アリューは迫り来る「神」の口から放たれた木の種の様な物を薙ぎ払い、それを「神」の顔面に跳ね返した。その物体は「神」の顔に当たると爆発を起こす。どうやらあの木の種の様な物は炸裂弾だったようで、「神」も堪(たま)らずよろけた。

「ビュリリリリリリリリリリリリ！」

怒りに満ちた「神」の咆哮が響く。

「危ないから下がっているアル！」

「う、うん」

僕はアリューに言われるがまま物陰に隠れた。

高校生男子とは思えない情けなさだが、こんな人外バトルに介入できるような力は持ち合わせていないし、逆にこのままここにいてはお荷物になるだけだろう。

「ヒュリリリリリリリリリリリリリリリリリリ！」

ボッボッボッボッボッボッボッボッボッボッボッボッ！

「神」が再び口から木の種の様な炸裂弾を吐き飛ばした。
しかも今回は一発ではなく、十発もの出血大サービスである。
「当たるか！」
しかし、それらは文字通り目にも止まらぬ速さのアリューの神足によって全てかわされてしまった。
驚いた「神」が、今度はその槍のような細長い腕をアリューに突き出す。
「はっ！」
だがアリューはそれを体を少し浮かせただけでかわし、そのまま腕に着地した。さらに先程とは桁違いのスピードで腕の上を走り抜ける。
同時に走っているアリューの体に黒い稲妻が走り、やがてそれはアリューをすっぽり包み込み、一本の黒い光の筋に変えた。
「ブラック・レイ・ランサー！」
黒い光の筋は「神」の顔を射抜き、口の中にあった光の珠を打ち砕く。
そして黒い光の筋はそのまま地面に着地すると、光が消えていき着地の体勢をとったアリューが現れた。
「ヒュリリリリリリリリリリリリリリリ！」
「神」が断末魔の叫びを上げる。
すると体が赤い結晶体へと変わっていき、やがて爆散した。
赤い霰が降る中アリューは少しの間黙って立っていたが、やがて槍を元の飾りに戻しスカートに付けなおす。
「もう大丈夫アルヨー！」
アリューが物陰に隠れる僕に手を振ってきた。
さっきまでの小悪魔の格好から元の姿に戻っており、安心した僕はゆっくりと腰を上げる。
そしてアリューのもとへ歩み寄ると、僕は右出を差し出し、
「ありがとう。僕は主人（あると）。塔城主人（とうじょうあると）。よろしくね」
名前を言うのを忘れていたので、お礼のついでに自己紹介した。

「どういたしましてアル！　改めてよろしくアル！」
アリューが破顔の笑顔で僕の手を握り返す。
「そう言えば気になっていたんだけどさ」
と、自己紹介が終わった所で僕は話題を切り替えた。
「君達『デルタ界』の住人は昆虫に憑依してこの世界に来ているって言ってたけど、君は一体何の昆虫に憑依してるんだい？」
そう、僕はそれがずーっと気になっていたのだ。
アリューもあの「神」と同じ異次元人だと言うなら、彼女も何かしらの昆虫に憑依しているはずである。助けてもらっておいてこんな事を聞くのは野暮かもしれないが、彼女の体は昆虫が変化した体なので、何と言うかその、せめて自分が今何に触っているのかくらい知りたいじゃないか。
カブトムシとかチョウチョとかならいいけど、毛虫とかだったら絶叫モノだ。嫌いなんだよ、毛虫。
「むふふふー、知りたいアルカ？」
アリューはまるで好きな人に想いを伝えるかの様に頬を染めた。
いや、こっちとしては結構切実な問題なので真面目に答えてほしいのだが……。
「うん、知りたいな」
「ニシシシ、なら教えてあげるアル！　私が憑依している昆虫は……」
そして彼女はそのいい笑顔のまま、衝撃的な真実を口にする。
「「ゴキブリ」アル！」

一新紀元（後書き）

次回まだ残っている謎とかが解けマス。例えば「何でアリューがこの世界を守ろうとしてくれているか」トカ。その辺を知りたい方は次回を楽しみにしていてくだサイ。

安常処順（前書き）

続きデス。この辺から作者の趣味が暴走し始めマス。それでも読みたいと思ってくれる優しいお方、どうぞお楽しみくだサイ。

安常処順

僕は全身全霊、死力を尽くして走っていた。
そのスピードはいつもの僕からは想像もつかない程の速さである。
人間、危機に陥ると身体のリミッターが外れ凄まじい身体能力を発揮すると言うが、まさに今の僕がそうなのだろう。
だってあり得ないもん。
あの子が、アリューの正体が……「アレ」だなんて！
「何で逃げるアル？」
「ぎゃあああああああああああああああああ！」
いつの間にかアリューが僕の脇に並んで走っていた。
まあ、彼女の身体能力を考えれば不思議はない。何せ素（もと）になっているモノが「アレ」なのだから。
そう、さっき僕は聞いてしまったのだ。
アリューが今憑依しているモノが「何」なのかを。
「私が憑依しているのが「ゴキブリ」だっていう事に何か問題でもあるネ？」
「どぅわあああああああ！　言うなぁ！　言うんじゃないぃ！」
僕は必死になって彼女の言葉を否定した。
だって僕はさっき握手したんだぞ、「アレ」と！　その前には押し倒されもしたしな、「アレ」に！
そんなの認められるかぁ！
「むぅ、もしかして私の話を信用していないアルカ？」
必死に逃げる僕を見てアリューが素敵な勘違いをしていた。そういう問題じゃないんだよ！
「ならこれで信じてもらえるアルネ！」
彼女は何かを思い付いたように帽子を脱いだ。
「そんな事しても証拠になる訳……」
なる訳ない。

そう言おうとしたのだが、僕の言葉それ以上続かなかった。
何故ならアリューが帽子を脱いだ瞬間、巨大なゴキブリになったからである。
黒光りする平っべたい体、シャカシャカした六本の脚、頭から生えた体長の倍ほどの長い触角、背中から生えた黒い翅。
それはまさしく、昆虫綱ゴキブリ目ゴキブリ科に属する昆虫、クロゴキブリだった。
だけど、でかい。でか過ぎる。
体長みしておよそ百五十センチ強、女子中学生の身長と同じ位である。
そんな化け物サイズの巨大ゴキブリが、今まさに僕のすぐ横で並走しているのだ。こんな恐ろしい事が現実に起こるとは。
「ああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！」
僕は獣の如く咆哮しながら必死に走って、走って、走りまくった。
こんなところ誰かに見られたらそれこそ絶叫物だろうが、最早僕に周りの目を気にしている余裕はない。
僕はしばらくの間町内を走り続けた後、家から少し離れた所にある『三途川（みと）』の川原にある公園で止まった。
幸い、アリューはいつの間にかいなくなっている。どうやら何処かでうまく撒いたようだ。
「はぁー」
安心した僕は公園のベンチに腰を下ろし、深いため息をつく。
僕は一体何をしているのだろうか。
変な女の子に会って、異次元から来る化け物との戦いに巻き込まれて、巨大なゴキブリから逃げ惑って。そんな超常展開誰も望んでないっての。
とか言いつつ、僕は心の何処かで少し後悔していた。
変わらない日常、退屈な毎日。
そんな「当たり前」が、さっきの一騒動で大きく塗り替えられた。

かなり怖かったが、同時にワクワクしていたというのも事実である。
「……」
本当に逃げて良かったのだろうか。
「日常」から脱するチャンスだったというのに。
「……バカバカしい」
何を言っているんだ僕は。
どんなに面白い展開だからって僕が死んだら元も子もないじゃないか。
そういうモノは傍観者だから面白いのであって、当事者は口が裂けても面白いだなんて言えないだろう。
平和が一番。
「おや、どうした若いの」
誰かに声をかけられたので、その声のした方に視線を向けると、何本か釣竿を背負ったいい年のおっさんがいた。
服はボロボロで薄汚れていて、おっさん本人も垢で塗（まみ）れている。いわゆるホームレスと言う奴だ。背負った釣竿だけは妙に新しいけど。
「こんな時間にこんな場所にいるとは、さては兄ちゃん、学校サボったな」
おっさんは僕の横に座ると、親しげに話しかけてきた。
これでこのおっさんが人間に擬態している「神（アバター）」だったら今頃僕はあの世逝きだっただろうが、おっさんはただニコニコ笑っているだけである。どうやら杞憂だったようだ。
「……ええ、ちょっと一騒動ありましてね」
僕はそれとなく警戒しつつ相槌を打つ。
「まあ、詳しくは聞かんよ。わしも若い頃はそれなりにやんちゃだったしなぁ」
おっさんが感慨深い表情で空を見上げた。「やんちゃだった」頃の事を思い出しているのだろう。

現状で若者である僕にはその気持ちはよく分からないけれど。
「さて、話してばっかりもなんだ。せっかくだから釣りでもしながら話さんか？」
おっさんは脇に置いてある釣竿を誘うように見せつけてきた。
「……ええ、いいですよ」
まあ、このおっさんは「神」ではないようだし（確実な証拠はないけど）、今更学校行く気もしないしな。
「ただし僕は素人なので、三度の飯より釣りが大好きな田舎坊主みたいにはいきませんよ」
「いや、そこまで期待してないから。さあ、行こうか」
僕とおっさんは川原の方に降りて行き、釣竿を垂らした。
僕の垂らす釣竿はおっさんから借りた物で、普段は知り合いのホームレスの人に貸して釣りをしているらしい。
「ふぅ、釣りはええなぁ。ノルマもなく、自由にのんびりと楽しむ事ができる」
釣りを始めると、おっさんがしみじみと空を見上げながら呟いた。
「そうですね」
確かにこうして時間を忘れてのんびりとできるのなら釣りも悪くない。その代り明日母さんとかにめいいっぱい怒られるだろうけど。
おっさんは気分を良くしたのかうんうんと頷き、
「ところで兄ちゃん一人なんだい？　友達とかは？」
そんな質問をしてきた。
「……」
瞬間、僕の顔が引き攣る。
このおっさんは何て残酷な質問をしてくるのだろう。詳しくは聞かないって言ったじゃないか。
「……ははは、いますよ、今ここにはいないけど。愛と勇気ってお友達がね。あの賞味期限切れのカビパン……いや、アンパン男と同じですよ」
「いやいや、彼は現役だから！　毎回あの頭新品に変わってるから

！　って言うか、あれ？　今の聞いちゃいけなかったの？　若者が学校サボったら、大体は誰かとつるんでだべっているもんだとばっかり思ってたから……謝ります、ごめんなさい、許してください！」
「いえ、いいんですよ。僕みたいなのび太系の奴は、自称友達のデスボイス・マイスターTに搾取され、心友と言う名の狸型ロボットの脛を齧るようなニート人生を送っていればいいんですよ」
「君、何でさっきから国民的アニメに対して否定的なの！？」
「僕にとっての国民的アニメは「クレヨンしんちゃん」だけだぁ！」
「何でドラえもんとかを差し置いてクレヨンしんちゃん！？」
「ああ！　臼井先生、帰って来てくれぇ！」
「その愛を他の二人にも向けてあげなよ！」
「おっと」
おっさんとの楽（ばかな）しい会話をしている内に、僕の竿が引いていた。
「引いてるぞ！　行けぇ、少年！」
おっさんが僕の釣竿に手を添える。ちょっと臭うが、気にしたら負けだ。
「言われずとも、釣り上げて見せますよ！」
竿が大きくしなっている。かなりの大物らしい。
僕は渾身の力を込めて竿を引いた。
「セレクトBB！」
「それ、釣れる物違う！」
“きゅうしょにあたった”僕の全力で釣り上げた物は……薄汚れたセレビィのぬいぐるみだった。
「誰だよ捨てたの！　ボックスいっぱいだったの？　自然を汚しやがって！　って言うか何でセレビィなんだよ、いらねぇよ！　そこはせめてミュウにしろよ！　許さんぞ、ゲームフリーク！」
「逆恨みにも程があるだろう！　……おっと」
今度はおっさんの竿が強く引いている。
「少年！　手伝ってくれ！」
「はい来た！」

「よし、行くぞぉ！」

そして、僕とおっさんはひとつになった。

「まぜっこモンスタァァァアアア！」

「多分それ、誰も覚えてない！」

正式名称は「超魔神英雄伝ワタル　まぜっこモンスター」で、ひたすら色んなマンスターを混ぜて育てるゲームである。「まぜモン」と言う略称からも分かるように「ポケモン」の後釜を狙って登場したのだが、出落ちで終わってしまった懐かしのゲームだ。絶対誰も覚えてない。

それはそれとして、僕とおっさんがひとつになって釣り上げた物は、

「カアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

超巨大な化け物だった。

ムカデの様にいくつもの体節に分かれた黄色く細長い体で、各体節ごとに昆虫を思わせる一対の脚が生えている。頭には全長の半分程の長大な触角が生え、二対の複眼と鋭い牙の生えた巨大な口を持ち、口の中には前にも見た赤い光球があった。

――――『＃003：Avatar（アバター）・The（ザ）・Lithium（リチウム）』

――――

「ひっ……何だ、この化けも……」

「バオォォオオオオオン！　ゲァァアアアアアアアアアアアアアア！」

恐怖で身が竦んだおっさんを、「神」が一飲みにする。

そしておっさんを食べ終えた「神」が僕の方に視線を移し、

「カアアアアアアアアア！　バオォォオオオオオオン！　ゲアアアアアアアアアアアアアア！」

「神」が竜の如き咆哮を上げながら、その頭を振り下ろしてきた。

「……」

鋭い歯の並んだ巨大な口が僕に迫る。
そうか、僕、死ぬのか。
おっさんみたいに一飲みにされ、「神」の命の糧にされてしまうのか。
短かったな、僕の人生……。
「待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
と、僕が走馬灯を見始めた時、下流の方から黒い物体がこちらに向かって飛んで来た。
「おりゃあああああああああああああ！」
「グゥガアアアアアアアアアアアアアア！」
黒い物体はその速度のまま突っ込み、吹っ飛ばされた「神」が水面に叩き付けられる。
「アリュー！？」
その黒い物体はアリューだった。
さっき飛んで来た時は動きが速過ぎて黒い塊にしか見えなかったが、今目の前にいるのは紛れもなくアリューである。
「大丈夫だったアルカ？」
アリューは華麗に宙返りしながら僕の目の前に着地すると、心配そうな顔で聞いてきた。
「……う、うん。大丈夫だよ」
それに対して僕は間誤付きながら答える。
そう、僕は無傷である。体は。
「そ、それより何で「神」がこんな川にいるの！？」
僕は恐怖を紛らわす為に、そんな質問をした。
「私達『デルタ界』の住人は憑依した相手の体を乗っ取って自分の物にする……けど同時に憑依した相手からも「本能的な部分」の影響を受けてしまうアル」
「え？　どういう事？」
「簡単に言えば、相手の「習性」を受け継ぐアル。この世界で言えば憑依している昆虫の習性ネ。奴が憑依しているのは「ヘビトンボ」

。ヘビトンボは清流に潜む肉食の水生昆虫アル」
「そうか、だから川の中に……でもさ、「神」って人に擬態して社会に紛れているって言わなかったけ？」
「そう、それが正しいやり方アル。でも、外国に行った人がその国に馴染めない様に、人に化けて社会に潜むのも結構しんどいアルヨ。だから問題がなければ、あいつみたいに習性に従って本来の姿のままでいる奴もいるアル」
「そんな理由で……」
何か妙に人間臭いな。
まあ、「神」の本体は異次元「人」だから仕方ないと言えば仕方ないが。
「……あれ？　それじゃあ、君は何で人間に擬態するばかりか人間の味方を……」
そう言えば黙ったまま答えてくれなかったな。
と、その時。
「カアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
まるで会話を打ち切るかのように、ダメージから復活した「神」が水中から飛び出した。
「さてと」
アリューもまた、話はここまでと言うように川の方を見る。
「あいつに飲み込まれたおっさんを助けるアルヨ！」
「え？　おじさん生きてるの？」
あのおっさんは「神」に食われて死んだはずじゃ……。
「おっさんは丸呑みにされただけアル。だから、消化される前に助け出せば大丈夫アル」
そう言い切るのと同時に、アリューの姿がデュアル・ランサーを携えた、小悪魔の様な戦闘モードに変わっていく。
「さあ、行くアルヨ！　「神」！」
「カアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

アリューと「神」の両者が改めて対峙した。
「……って、あれ！？　理由話してもらえないの！？」
「……それは」
「それは？」
「次回をお楽しみに！」
「アイキャッチすればいいと思うなよ！」
「サービス、サービス！」
「うるせー！」
そして、全ては次回に持ち越される。

安常処順（後書き）

まず謝りマス。ごめんなサイ。前回のあとがきで「謎は全て解けた！」みたいな内容になるとか言いツツ、結局次回に持ち越されまシタ。すいませン。許してくだサイ。予想より分量多くなったノデ……次回はちゃんと解決しマス。……では次回をお楽しミニ～！

青天霹靂（前書き）

今回こそアリューが「何故人類の味方になったのか」と言う答えが明かされマス。内容的に色々カオスでスガ、それでも読んでくれる神様みたいな方、どうぞお楽しみくだサイ。

「カアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
「神（アバター）」が青天を切り裂くような凄まじい叫び声を上げた。
ヘビトンボの「神」である“ソレ”はその細長い体を蛇の様にうねらせながら、水上滑るように進む。
「フン！　来たアルネ！」
その前方で、一人の少女が水面を疾走していた。
小悪魔の様な黒いワンピース姿の少女は、手に身の丈ほどのデュアル・ランサーを持っているにもかかわらず、沈む事なく水上を駆け抜ける。
少女の名はアリュー。
僕達人類を守るためにやって来た「異次元人」だ。
だが、彼女が何故人類を守ってくれるのかはまだ分からない。
その答えはこの戦いが終わった時に解き明かされる……。
「バォォオオオオオオオオオオオオオン！」
アリューの後を追う「神」が龍の如き咆哮を上げた。
すると、「神」の口の中にある赤い球が光り輝き、周りに生える鋭利な歯が稲妻を帯び白熱化する。
「ゲアアアアアアアアアアアアアアア！」
そして「神」はその細長い体をしならせたかと思うと、まるで楔（くさび）の外れた箍（たが）の様に、アリューへ向けて突っ込んだ。
「おっと！」
アリューがそれを背中の翅で体を少し浮かせる事でかわし、そのすぐ下を「神」の噛みつき攻撃が炸裂する。
その白熱化した巨大な顎から放たれる噛みつき攻撃は、周囲の水を蒸発させ、空気中に稲妻を巻き起こした。
「アレをまともに食らったらひとたまりもないアルネ」
「神」の凄まじい攻撃を目にしたアリューが小声で呟く。

確かにあんな攻撃食らえば骨ごと噛み切られるどころか、骨すら残らず蒸発してしまうだろう。
「はぁあああああ！」
アリューの槍に黒い稲妻が走り、アリューはそれを後ろに向けて振るった。
槍から放たれた無数の黒い稲妻が、鞭の如く「神」へと襲い掛かる。
「クォオオオオオオオオオオ！」
だが、「神」はそれらを激しく体をくねらせて全てかわしてしまった。
「カアアアアアアアアアアア！」
しかも、攻撃をかわしつつ、口内に新たなエネルギーを貯めている。
「ちっ、速いアルネ……」
その様子を見ていたアリューが舌打ちしつつ前に向き直ると、
「な！」
前方数メートル前に橋があった。
橋長約二百メートル、『三途川（みと）』に架かる中でも最大級の橋、『奪衣橋（だつえばし）』である。
「うわわわわっと！」
アリューはぶつかるすんでの所で無理やり体を浮かせて橋の支柱に着地し、そのまま支柱を駆け上がった。
「バォォオオオオオオオオオン！　ゲアアアアアアアアアアアアアア！」
少し遅れてアリューの着地した支柱に「神」の噛みつき攻撃が炸裂する。
鉄骨鉄筋コンクリート製の図太い支柱はその三分の一程が抉り取られ、抉り取られた部分はマグマの様に溶けて煙を上げた。
「グゥォアアアアアアアア！」
支柱を噛み切った「神」は盛大に水しぶきを上げながら着水した

後、橋の上へと逃げたアリューを追うように空中に向けて飛び跳ねる。
「カアアアアアアアアアアアア！」
すると「神」の背中に一筋の割れ目ができ、その割れ目を突き破って更に異形と化した「神」が姿を現した。
二対の丸い複眼は鋭利な形になり、頭からは二本の巨大な角が生え、各体節にあった脚は鋭い棘に変わり、そのすぐ上の方から一対の透明な翅が生えている。
「神」は空を泳ぐように体をくねらせ、アリューの後を追った。
「カアアアアアアアアアアアアアアア！」
「くそ！　脱皮して成虫になったアルネ！」
橋の高欄の上を走るアリューと、それを追う「神」が猛スピードの小競り合いを繰り広げる。
「クゥォオオオオオオオオオオオオオ！」
「神」の棘が触手の如く伸び、アリューを串刺しにしようと雨あられの様に襲い掛かった。
「はっ！　ほっ！　てやっ！　たあ！　とう！」
アリューはそれをギリギリのタイミングで避け続ける。
「カアアアアアアアアアアアアアアア！　バォォォオオオオオオオオオオン！　ゲアアアアアアアアアアアアアアア！」
「どぅわあっつ！」
必死に避けるアリューに「神」が追撃の噛みつき攻撃を放ち、アリューが空高く飛び上がってかわした。
「クゥォアアアアアアアアアアアアアア！」
さらに「神」が空のアリューに向けて再び触手の雨あられを浴びせ、
「とぅおりゃあああああああああああ！」
アリューはそれを体を捻り、回転させ次々とかわす。
「はっ！」
そして、アリューはその内の一本に着地すると、触手伝いに猛ダ

ッシュした。同時にアリューを黒い光が包み込み、一筋の光の矢と化す。
「グゥォオオオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
それに対して「神」はさっきの倍はあろうかと言う触手をを放った。
「はああああ！」
だが、黒い光の筋はその触手のシャワーを吹っ飛ばし、「神」に向かって一直線に突き進む。
「カアアアアアアアアア！」
そして、「神」も噛みつき攻撃の態勢に入った。
「てやああああああああ！」
「バオオオオオオオオオン！」
「あああああああああああ！」
「ゲアアアアアアアアアア！」
「うりゃあああああああああああああああああ！」
激しい光が当たりを包み込む。
両者の真向からの一騎討ち、その結果は……。
「神」の赤い光球を白熱化した牙ごと打ち砕き、そのまま「神」の中を突っ切ったアリューが勝利の咆哮を上げた。その腕にはさっき丸呑みにされたホームレスのおっさんが抱かれている。
「グゥォオオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
「神」が断末魔の叫びを上げて、その体を赤い結晶へと変え爆散した。
「凄い……」
赤い雪の降りしきる橋を、僕は遠くから呆けたように見つめる。
「よっと！」
そんな僕の前に、戦いを終えたアリューが天使の如く降り立った。
すでにいつもの格好に戻っており、手には槍はなく、ホームレス

のおっさんだけが残っている。おっさんは「神」の体液でぬるぬるしていた。まあ、元から小汚かったが。
「えい！」
そして、アリューはおもむろに川に投げ入れた。さらに、ぼろきれの様な服の首根っこを掴んでグルグルと掻き回す。
「ええ！？　いきなり何してんの君！？」
「洗濯」
驚く僕にアリューが平然と答えた。
いや、確かに汚いけど、その扱いはあまりにも酷過ぎるんじゃないかな？
あー、ほら、おっさん苦しそうにもがいてるから！
出してやれよ、そろそろ！
「げほ、ごほ、がは！」
手動式アリュー洗濯機から解放されたおっさんが、苦しそうに咽返す。
「神」に丸呑みにされ、ようやく九死に一生を得たと思ったら、汚いからと洗濯されるとは……おっさん、カワイソ過ぎる。
「大丈夫アルカ、おっさん」
「君のせいだろうが！　あー、大丈夫ですか？　おじさん」
おっさんの肩に手を置くと、小刻みに震えていた。川に放り込まれた事もあるだろうが、もっと別な事で震えているのだろう。
「あ、ああ。しかしさっき見た恐ろしいものは一体……」
おっさんは青ざめた顔で僕の顔を見てきた。
まあ、無理もないだろう。あんな目にあった後では……。
「……悪い夢でも見ていたんですよ」
僕はおっさんに嘘をついた。
あんな恐ろしい真実よりも、優しい嘘の方が今のおっさんに必要だろう。トラウマなんてない方がいいに決まっている。
「……そうか、そうだな」
僕の嘘を信じたのか、おっさんは静かに微笑んで立ち上がり、

「はっくしゅんんん！」
盛大なくしゃみをした。
いくら昼間とは言え、衰弱した体で川に放り込まれたらそうなるわな。
「そんな恰好では風邪ひきますよ。何か着る物貸しましょうか？」
と言っても、今は僕が着ている制服しかないのだが。
「いや、大丈夫だよ。テントに戻れば代わりの服がある」
おっさんはそう言って僕の申し出を断った。そして僕へ背を向けて歩き出す。
「なんか怖い夢見たけど、今日は楽しかったよ。今度また学校サボった時にでも釣りをしよう」
「……ええ、そんな機会があれば」
「ああ、それまでわしはまぜモンでもやっとるよ」
「仕事してください」
おっさんが見えなくなるまで見送った後、僕は公園のベンチに座った。
「さて、戦い疲れた後に聞くのもなんだけど、君は何で人類の味方をするようになったんだい？」
「……えっと、言わなきゃダメアルカ？」
アリューがもじもじしながら僕を上目使いで見てくる。
「うーん、そこはちょっと外せないかなぁ」
じゃないと読者に立つ瀬が……おっと。
「……分かったアルヨ。読者を盾に取られては仕方ないアルネ」
「勝手に人の心読むな。そしてメタな発言はするな」
メタな発言は主人公の僕にしか許されないのさ。
……え？　主人公に見えない？　……ほっとけ。
「私達『デルタ界』の住人は憑依した相手を乗っ取ると同時に、相手の習性も受け継ぐ……ここまではいいアルネ？」
仕切り直すようにアリューが口を開いた。
「うん。だから場合によっては、さっきみたいに習性に従って生き

る奴もいるんでしょ？」
「そう、その相手の習性に問題がなければそれでいいアル。だけど、私が憑依した「ゴキブリ」の習性には大きな問題があったアル」
「ぐはっ！」
「どうしたアル？」
「いや、何でも……」
そう言えばそうだった。さっきの騒動のせいでちょっと忘れそうになってた分、ダメージでかいな。
「……気にせず続けて」
「そうアルカ？　なら続けるアルガ……」
きょとんとした表情で小首を傾げるアリュー。
そのまんまなら可愛いんだがなぁ……。
「ゴキブリは野山に暮らす奴も多いけど、私の憑依したクロゴキブリはご存じの通り人の家に住みついているアル。温かいし、エサもたくさんある……つまり、ゴキブリからすれば人間はいいパートナーって訳アル」
うーむ、そう言われるとそうなのかもしれないが、それだけは絶対に認めたくない。
「だからその……ゴキブリは習性的に人間と敵対していないアルヨ。しかも、ゴキブリはあまりにも人間と関わり過ぎていて、その影響力もかなり強いアル」
……何だか、だんだん言いたい事が分かって来たぞ。
「……つまり、君は元々は「神」と同じ侵略者だったけど、「人間と近しい」というゴキブリの影響を受けて、人間の味方になっちゃったって事？」
「うん！　その通りアル！」
「馬鹿じゃねーの！」
僕は思いっきり叫んだ。
命の恩人にこんな事を言うのは失敬極まりないが、でも言わずにはいられませんよ、これ。

「ひどい！　そこまで言う事ないじゃないアルカ！」
「うん、ごめん！　でも、馬鹿じゃねーの！　何だその電車乗り間違えたみたいな話は！　何？　僕らそんな馬鹿みたいな理由で助けられてるの？　人類ナメてんのか！」
「だってだって、初めて侵略作戦に参加させてもらえたんだもん！　嬉しくってはしゃいでたら、うっかりゴキブリに憑依しちゃってたんだもん！」
「「もん」じゃねえよ！　つーか聞きたくなかったよ、そんな裏話！　余計ダメじゃねえか、このドジっ娘！　脳タリン！　おたんこなす！」
「どんどん口が悪くなってるアルヨ！」
「悪くもなるわ！」
僕はがっくりとうなだれた。
「……うわぁ、何コレ。さっき一瞬でも悩んじゃった自分が馬鹿みたいじゃないか……」
「あのー」
うなだれる僕に、アリューが物干しそうな視線を向けてくる。
「……何？」
「ちょっとお前にお願いがあるネ」
「お願い？」
何だろう？
異次元人のお願いなんて想像もつかないけど、さっきまでの罵詈雑言の埋め合わせくらいはしないとな。仮にも命の恩人だし。
「お願いってなんだい？　僕にできる事ならするよ。さっきは言い過ぎたしね。ごめん」
「いいアルよー！」
アリューが破顔の笑顔を浮かべる。
本当に可愛いな、この娘。ゴキブリだけど。
「それで、お願いアルが」
「うん」

「ほら、私は侵略するつもりで身一つでこの世界に来たアル」
「うんうん」
「だけど、手違いとは言え結果として私は人類の味方になってしまったアル。だから僕には帰る所がないアルヨ」
「うん、それで？」
それで？　と言いつつ、僕はアリューが次にどんな「お願い」をしてくるのか半ば予想がついていた。
でも、僕は諦めない。
神様仏様、お願いだから僕の予想を外してください！
「お前の家に私を住ませてほしいアルヨ！」
「やっぱりかぁぁあああああああああああああああ！」
アリューの期待を裏切らない「お願い」に、僕は青天に向けて叫んだ。

青天霹靂（後書き）

次回この物語のヒロイン出てきマス。アリュー？　アリューはヒロインではなくてもう一人の主人公デス。とにかく次回も作者の趣味が全開ですので、乞うご期待。

蟻蟻潰堤（前書き）

予告通り、ヒロインが登場しマス。どんな娘かは実際に読んで確かめてくだサイ。ではデハ、こんなカオスな物語を読んでくださる方、どうぞお楽しみくだサイ。

蟻蟻潰堤

朝の騒動から十数分後、僕は学校にいた。
私立月陰高等学校。
市内でも結構有名な名門校で、生徒の数もこの町で一番多い。その数総勢千二百人。
それに比例して校舎も馬鹿みたいに広く、プールとか体育館などといった付属施設も阿呆みたいに広大で、グラウンドに至っては東京ドーム程もある。一体この高校はどこを目指しているのだろう。
「はぁあ……」
あの後、僕はアリューの「お前の家に住ませてくれ」というお願いを突っぱねて、逃げるように登校してきた。
いや、実際に逃げたのだろう。
いくら命の恩人のお願いとは言え、ゴキブリを家に住ませてあげる程心の広い人間ではない。彼女には悪いが他を当たってもらおう。
それにアリューと深く関わるという事は、「神」の脅威に身を投じるのと同意義だ。
僕だけならまだしも、母さんや、これから会う事になるあの娘を危険な目に遭わせる訳にはいかない。
「さて、行くか」
ちょっと罪悪感に苛まれつつも、僕は気持ちを切り替えて校門を潜った。
校門を潜るとすぐにグラウンドと校舎があり、グラウンドの周りには防風林としてクヌギの木が何本も植えられている。
普通ならポプラとか桜の木を植えるのだろうが、校長が昆虫採集が趣味とかで、虫が寄って来やすいようにわざわざどっかの山から買い取ってきた物らしい。酔狂な校長だ。おかげでグラウンド中が樹液臭い。
僕はただっ広いグラウンドを横断し、校舎に向かう。

もう始業時間はとっくに過ぎているので、グラウンドには人っ子一人いない。
「……？」
不意に、誰かの視線を感じて辺りを見回した。だが、周りには誰もいない。
「気のせいかな……」
僕はあまり深く考える事なく校舎に向かった。
僕は後にこの事でかなり後悔する事になるのだが、それは別の機会に。
「……」
僕は玄関で靴を履き替え、自分の教室に向かう。
だけど、正直今日はあんまり教室に入りたくない。教室が二階の端っこにあるので行くだけで結構疲れるし、遅れて来た事で担任の先生に説教される（ただ、クラス担任兼現文担当の橘（たちばな）先生は優しい人なので、今が現文の授業だったら怒られずに済む）というのもあるのだが、一番の理由はあの娘に会わなければならない事である。
そう、今入れば彼女に会わなければならない。
……うわー、嫌だ、帰りたい。
だが、最早ここまで来て帰るという訳にもいかないだろう。
僕は覚悟を決めて自分の教室のドアを開けた。
「……失礼します」
僕の教室は七十平方メートル程の広さで、正面に黒板、左側に窓、右側に廊下との境界となる壁がある。それに対して座席は横に十個で一列としてそれが四列、計四十人分あり、正直言うとちょっと狭い。
「……」
教室に入った僕はまず教卓の方を見る。今の授業は……。
「ふんふふふん、ふ～ふふふん、ふ～ふふふん、ふんふふふん、ふふふん、ふふふ～ん、ふんふん、ふんふふふふふん、ふんふふふふふん、ふふふふん、ふふふふん、ふふふふん」

教卓には橘先生が立っていた。
先生は楽しそうに鼻歌を歌いながら黒板に何か書いている。
ラッキー。とりあえず先生陣からはお叱りを受けなくて済む。
でも何で鼻歌のチョイスがそれ？
「あら、主人(あるじ)くん、おはよ～」
教室に入って来た僕に対し呑気な声で挨拶してきた。
「……おはようございます」
「んふふ～、今日はいい天気だね～」
「ええ、はい、そうですね」
うーむ、この人怒らないからいいんだけど、マイペース過ぎて考えが読めないから対応に困るんだよな。
「それで、今日はどうして遅れて来たの～？」
「……えっと、朝ちょっと他校の生徒に絡まれまして……」
「ふ～ん、それは大変だったね～。飴食べる～？」
「いや、いいです」
「え～、まあいいや～。席着いて～」
「はい」
僕はとりあえず申し訳ないという態度を取りながら席に着く。
そして席に着いた瞬間、顔面にグーパンチを食らった。
「がふっ！」
「ん～？　どうしたの～？」
「いえ、何でもありません」
僕は痛みに耐えつつ、隣の席を見る。
そこには見知った一人の少女がいた。
雪のように白い肌に血のように赤い瞳を持つ、モデルの様にスタイルのいい女の子で、艶やかな黒髪を肩の辺りで切り揃えている。
服装は襟とスカート共に赤に一筋の銀色のラインの入った、我が校伝統のセーラー服だ。
彼女の名前は青井(あおい)静奈(しずな)。
僕の幼馴染である。

「おっはよー、主人」
静奈がぶっきら棒に挨拶してきた。
「……おはよう、静奈」
未だに痛む頬をさすりながら僕も挨拶を返す。
普段なら先に僕が来て座り、後から来た静奈が僕に挨拶するというのが朝のお決まりコースなのだが、今日は逆に僕の方が静奈に挨拶する事になってしまった。しかもグーパンチ。
「しかしあんた、不良に絡まれたんだって？」
静奈がじろり、と僕を睨む。その視線には明らかに怒気がこもっていた。
「……う、うん。ちょっとゴミを捨てようとしたらね」
僕は冷や冷やしながら静奈の質問に答える。怒ると怖いんだよ、この娘。
「はあ……」
そんな僕の返答に、静奈はため息交じりに顔に手を当てた。そしてまた僕を睨みつける。
「あんたは本当に昔っから厄介事に関わる天才よね。私は一体いつになったらあんたから目を離せるのかしら！」
そう言いつつ、静奈は僕の頬を思いっきりつねった。しかも殴った方の頬を。
「いてて……痛い、痛い」
「うっさい。心配してる私の身にもなりなさいよ。胃に穴が開くわ。少しは厄介事に遭わないように周りに少しは気を配りなさい」
静奈が有無を言わさぬ鋭い眼光で僕を威圧する。
「ううぅ、すいませんでした」
「分かればよろしい」
静奈は不意にふっと笑うとようやく僕を解放し、次の瞬間には何事もなかったかのように授業に戻っていった。
「いてて……」
頬が未だにじんじんと痛む。あれだけ立て続けに同じ場所を攻め

られたのだから当然だ。
だが、こうされるのも仕方がないかもしれない。
彼女には昔から世話になりっぱなしなのだ。
え？　主人公のくせに情けないって？
仕方がないだろう。
彼女はいわゆる「天才」なのだ。しかもそんじゅそこらの天才とは比べ物にならない程の「超・天才」である。
全国模試一位の学力に全国区レベルの身体能力、実家は世界トップの巨大企業『デルタ・コーポレーション』の社長。
何処を取っても非の打ちどころのない、世界最高最強の天才だ。
僕みたいな一介の高校生じゃあ敵いっこありませんって。
うん？　なら、どうしてそんな凡骨高校生がそんな蝶……じゃなくて超・天才の彼女と幼馴染なのかって？
答えてあげたい所だが、今は授業中なのでまた別の機会に。それと、凡骨って言うな！
「ん？」
と、授業に集中しようとした僕の目にそれは映った。
「んー？」
僕は必死に目を凝らす。
教室の扉から見える廊下の天井。
そこをカサカサ動く大きて黒い影。それは……。
「アリューー！？」
僕は大声で叫びながら立ち上がった。
「？」「？」「？」
当然ながら、クラス中の視線が僕に集まる。
しまった、つい声を出してしまった。
「どうしました～？」
橘先生が不思議そうな顔で首を傾げる。
「……」
そして隣からは痛い程の静奈の視線を感じた。

うーむ、どうしよう。せっかく許してもらったばっかりなのに……あ、そうだ。
「来たばかりですいませんが、不良に殴られた所があまりにも痛むので保健室に行ってもいいですか？」
本当は不良ではなく静奈に殴られた所が痛むのだが、ここは黙っておこう。
見るとさっきまで僕を睨みつけていた静奈が、いつの間にか明後日の方向に目を逸らしている。
やーい、ざまあ見ろ。
さっきは仕方ないかもしれないとか言ってたけど、実はけっこう根に持ってたんだよ！
「うん、分かった～。そう言う事なら、行ってらっしゃ～い」
橘先生は特に疑う事も問詰める事もせず、僕のお願いを聞いてくれた。やっぱりいい人だな、この人。
「さてと……」
教室を出た僕は廊下を見回す。
すでに何もいないが、さっき見たあれは間違いなくアリューだ。と言うか、天井を這い回る女の子というシュールな光景を見間違える程、僕は耄碌（もうろく）していない。
だけど、何だって学校にいるんだ。
まさか、今度は学校に「神（アバター）」がいるとか言うんじゃ……だとしたら早く見つけなければ。
しかし、僕にはアリューが行きそうな所なんて見当も……。
「待てよ」
アリューは憑依しているゴキブリの影響を強く受けている。
だったら、その行動原理はゴキブリの習性に寄る所が大きいはずだ。
つまり、ゴキブリのいそうな所を探せばいるはず……。
まあ、単なる予測にしか過ぎないし、アリューが何か目的があってそれに従って行動しているならどうしようもないが、アリューの

目的が不明な今はこの推測に頼るしかない。
ーーーーーで、数分後、家庭科調理室。
「本当にいちゃったよ……」
僕の視線の先。家庭科調理室の隅の方で、
「あう～」
ゴキブリホイホイに手を突っ込んだアリューが唸っていた。
ゴキブリは湿気があり、暖かい部屋を好む。
だからここにいるかなー、くらいの気持ちで来たのだが、本当にいるとは。しかもゴキブリホイホイに引っ掛かってるし。
どこまで阿呆なんだこの娘は。
「あ、お前！」
必死にゴキブリホイホイから手を抜こうとするアリューが、僕の存在に気付きこっちを振り向いた。
「な、何見ているアル！　助けるアルよ！　友達だろう！」
「いや、君とそこまで深い関係になった覚えはないんだけど」
まあ、友達云々はさておいて、命の恩人には違いないのだから、ただ見ているだけという訳にもいかないだろう。
僕はとりあえず調理用の油を探す。ゴキブリホイホイの粘着液は油を馴染ませると粘性が落ちるのだ。
「あ。あった、あった！」
調理用の油を見つけた僕は、さらに洗剤を用意して早速アリューのゴキブリホイホイの剥がす作業に入る。
えーっと、まず油を馴染ませて、馴染んだらゆっくり地道に剥がして、剥がれたら洗剤でよく洗って……。
「できた！」
「おぉ！」
自由になった手を見ながらアリューが感嘆の声を上げた。
「すごいすごい！　お前天才アルな！　せんべい博士くらいに！」
「そんな事でそこまで褒められると悪い気はしないけど、その表現はどうだろう」

どっちかって言うと早乙女博士がいい。
「お前いい奴アルな！　名前は何て言うアルか？」
「……」
あ、そう言えばまだ名前言ってなかったな。
開始してから早や六話、それなのに一切の自己紹介をしていない僕。あっちはニックネームまで解禁しているのにね。
「……僕は塔城主人。よろしくね」
「うん、よろしくアル！」
アリューが笑顔で右手を差し出してくる。
だけど、僕はその手を握り返えさなかった。
「いや、握手はしないよ」
「何でアル？」
プクーっと頬を膨らませるアリュー。うん、可愛い。もう否定しません。
「えっと、ほら、あれだよ。握手はもっとこう、“真の友情が芽生えた”時まで控えておこうかなと……」
本当はゴキブリに触るのが嫌なだけなんですけどね。
「むー、分かったアル」
ちょっと不満そうだが、どうやら納得してくれたようだ。
「その代り、私ともっと仲良くなったらその時は握手するアルよ！」
「……うん。わかった」
ただし手袋嵌めてね、という本音があったが言わないでおこう。
「それで、アリューは何でこんな所にいるんだい？」
「そう、それアル！」
突然アリューがずずぃいっと僕に顔を近づけてきた。
ルビーの様に真っ赤でつぶらな双瞳が僕を見上げ、イチゴの香りの吐息が顔にかかる。
うわー、何だコレ。
ゴキブリだと分かっていても、思わず胸がドキドキしちゃう……
いやいや、駄目だ駄目だその思考は。人間の姿をしているとは言え、

ゴキブリに心揺らされるなんてアウトだアウト！
「で？　な、何が、それなの？」
とりあえず心を落ち着かせるために質問を繰り返した。
そんな僕の事などお構いなしに、アリューはぐんぐん顔を近づけながら答える。
「実は、この学校に「神」が侵入しているアル！　でも、私はこの建物については詳しく知らないアル。だから、主人に一緒に探してほしいアル！」
「……はぁ」
やっぱり、そんな事だろうと思ったよ。
アリューがここにいる時点である程度は予想してたけど……さすがに学校の中にいるのに見過ごす訳にはいかないよなぁ。
「……分かったよ、一緒に探そう」
「わーい！　ありがとアルー！」
僕の返事を聞いたアリューが、無邪気にはしゃぎながら万歳をした。
僕はそんなアリューを見ながら、また静奈に怒られるなぁ、などと呑気な事を考えていたのだが、数時間後にその甘い考えに大きなしっぺ返しが返ってくる事となる。
「じゃあ、行こうか、「神」探し」
「うん！」
こうして僕は本当の地獄への第一歩を踏み出した。

蟻蟻潰堤（後書き）

次回、やっと主人公が主人公らしくなりマス。やっと彼にも春が来るんでスネ（出番的な意味デ）。それでは乞うご期待。

暗中模索（前書き）

タイトル通リ、「神」探しのお話デス。そう言えば「かくれんぼ」と言うホラーアニメがあったような気がしまスガ、皆さん見た事ありまスカ？　まあそれはそれとシテ、今回もなかなかコミカルかつカオスな内容でスガ、それでも読んでくださる方、どうぞお楽しみくだサイ。

暗中模索

太陽が徐々に真上へと昇る頃、僕とアリューは学校の廊下を歩いていた。

「ところで、今回「神（アバター）」が憑依している昆虫は何なの？」

僕は隣を歩くアリューに尋ねてみる。

「神」は昆虫に憑依した怪物であり、その行動には個体差はあれど素になった昆虫の習性に影響を受けたものとなる。

つまり、憑依している昆虫が何なのか分かっていれば、「神」の行動パターンもある程度は分かるという事だ。

アリューは出会ってから今まで、元の面影が無いに等しい異形な姿をした「神」の素になった昆虫を当ててきている。

だから、今回もしっかり分かっているものだと思っていたのだが……。

「分からないアル」

アリューは平然とそう答えた。

「ええ！？　分からないの？」

これは予想外である。

しかし何で今回に限って分からないのだろうか。

「主人（あると）は私を万能コンピュータみたいに思っているようアルガ、それは違うアルヨ。まあ、確かに私の憑依しているゴキブリは“逃げ”に特化した進化をしている分、私の感覚器官はレーダーばりに発達しているアル。でもそれだって万能じゃないアル。今日ここに来たのはあくまで「ここに「神」がいる」と感じ取ったから来たのであって、まだ見てもいない「神」が何に憑依しているのかなんて分からないアルヨ」

「……」

確かに今までアリューが「神」の正体を看破したのは「神」と相対した時だった。

まあ、異次元人とは言え生物なんだから、最新鋭の高性能レーダーみたいな性能を期待するのも無理があるか。その最新鋭のレーダーだって細かい所までは分からないんだし。
「……じゃあ、当てずっぽうに探すしかないって事？」
「うーん……でも、近くまで行けば擬態していても分かるアル。とりあえずは、そいつが人に擬態しているかどうか確かめるよう、人がいる所を重点的に探せばいいんじゃないアルカ？」
「そうだね」
なら、まずは教室だろう。
あとは職員室……と、美術室とかの特別教室か？
でも、今日何処か使う予定の特別教室あったっけ？
まあ、それは職員室の近くに行った時に、今日の時間割を見れば分かるだろう。だったら、先に職員室の方に行って時間割を見てから動いた方がいいか。
サボっている身としては一番近づきたくない所だけれど。
「じゃあ、まずは職員室の方に行こうか」
「うん！」
アリューがとても嬉しそうに、満面の笑みを浮かべる。可愛いなぁ。
とにもかくにも、僕らは家庭科調理室を後にして職員室に向かった。
で、数十秒後、職員室前。
「どうだい？」
僕とアリューは、気付かれない様に中を覗き込む。
「……気配がしないアル。ここにはいないアル」
アリューが首を横に振った。
「なら今日の時間割を確認するか」
えーっと、今日の予定は……特別教室は三限目に三年一組の美術と、四限目に一年五組で音楽室が使われるだけか。
だったら今の内に教室を回れるだけ回っておこう。

「アリュー、教室はどれくらい見たの？」
「適当にうろついてただけだから、主人がいた教室とその近くを二、三個見ただけアル」
ほとんど見ていないって事か。
なら、一階から順番に見ていった方がいいな。
「じゃあ、一階の教室から見ていこうか」
「分かったアル」
そして一階、一年生教室前。
まずは一組。
「いないアル」
次、二組。
「いないアルー」
次、三組。
「いないアール」
次、四組。
「いないアナル」
「何か言った？」
「ううん、何も」
その後十組まで順番に見て回ったがヒットはなかった。
「ふぅ、一年生にはいなかったか」
「じゃあ次は二階アルカ？」
「……いや、もう昼休みだ。このままだと誰かと鉢合わせしちゃうし、一旦休んでから再開しよう」
「お。じゃあ、お弁当アルカ？」
遠足かよ。
「うん、まあそうだけど、君、お弁当なんてあるの？」
「ないアル！」
「そんな堂々と言い切られても……仕方ないな、僕のお弁当分けてあげるよ」
皆、普通は鞄の中に閉まっているだろうけど、僕は外で食べるの

が好きなので下駄箱の上に置いてある。だから、今みたいにサボって教室に入いれない場合でも、弁当にありつけなくて困る事がないのだ。
「わーい、わーい！　ありがとうアル！」
「しっ！　あんまり騒がないで。……じゃあ、お昼にしようか」
「うん！」
アリューが頬に手を当てて喜ぶ。うーむ、可愛い。
そして、僕達は下駄箱の弁当箱を回収してから、屋上に向かった。
いつもは体育館の裏で食べる事が多いのだが、誰かと鉢合わせする可能性を考えると、施錠できる屋上の方が都合がいい。
因みに屋上は立ち入り禁止で鍵が掛かっているのだが、僕は針金を使って鍵を開けられるので問題ない。その技術には問題あるが。
「ほわー、広いアルネ！」
屋上に出たアリューが驚きの声を上げる。
総勢千二百人の生徒を収容しているだけあって、その広さは一般の学校の校庭程であり、アリューが驚くのも無理はない。これじゃあ屋上と言うより平原だ。
屋上に出た僕達は、出入り口の上に上って貯水槽の脇に腰を下ろし、持ってきた弁当を開ける。
中には日の丸のご飯、おかずは卵焼きにポテトサラダ、おひたし、金平ごぼう、メインとして豚の角煮と唐揚げが入っていた。
朝は忙しいのに、ここまで凝った物を作ってくれるとは。母さんには感謝してもし足りない。
「おおー！　おいしそうアル！」
アリューの目がキラキラと光り、口からはよだれが滴る。
「そりゃそうさ、母さんが作ったものだしね」
母さんお料理の腕は近所でも評判だ。よく『月光荘』の住人を家に呼んで、夕飯をご馳走したりしたものである。
「早く食べたいアルゥ～！」
「はいはい、ちょっと待ってね」

僕はご飯とおかずを半分ずつ弁当箱の蓋に載せて、アリューに手渡した。
「箸は僕の分しかないんだ、ごめんね」
「いいアルよ、手で食べるから」
「ごめん、じゃあこれハンカチ。……それじゃあ、いただきます」
「いただきますアル！」
そして僕達のお昼のお弁当タイムが始まる。
「まずはこれアル！」
まずはアリューが卵焼きを口に運んだ。
「じゃあ僕はこれ」
続いて僕が金平ごぼうに手を伸ばす。
「うん、おいしい」
「う～ん、おいしいアル！」
「じゃあ、僕は今度はポテトサラダを」
「なら、私は金平ごぼうを食べてみるアル」
「僕はそろそろメインの角煮を」
「ソーセージ！」
「女の子があんまりソーセージって叫んではいけません」
僕達は母さんの愛情こもった料理を噛みしめ、味わい、残す事なく食べ終えた。
「さて……」
弁当を食べ終えた僕は、携帯電話を取り出して時間を確認する。
現在時刻は午後十二時五十分。昼休みが終わるまでまだ少し時間があった。
「ふぅ……」
僕は携帯をポケットにしまい、地面に寝そべる。
「神」がいるかもしれないこの状況で、横になって休むのは些か危機感が足りないかもしれないが、今動いては誰かに見つかってしまう。それに、昼休みが終わらなければ生徒が教室に集まらないので、動く意味もない。

ならばこうして、一休みを入れるくらいの事をしても罰は当たらないだろう。朝の一連の騒動のせいで疲れているしな。
まあ、この後僕は罰が当たる事になるのだが。
「ねえねえ、主人」
と、同じく横になったアリューが話しかけてきた。
「何？」
「主人はMアルカ？」
「ばふ！」
いきなり何を聞いてくるんだこの子は。
「いや、違うから。何でそうなるのさ」
「だって、さっき隣に座っている女子からぶん殴られても、気持ち良さそうに蹲（うずくま）ってたじゃないアルカ」
見てたのかよ。
「いやいや、あれは授業中に騒ぐ訳にはいかないから我慢してたんだよ。されても仕方なかったしね」
静奈（しずな）には心配かけっぱなしだしな。
「ふーん、でもさ、普通あそこまでされたら、少しぐらい怒ると思うアルガ。あの女子、ひょっとして“コレ”アルカ？」
そう言いつつ、アリューは小指を立てる。何か古臭いな、そのやり方。
「そう言うんじゃないよ。ただの幼馴染さ」
「ふーん」
アリューは納得したのかしてないのか、何だかよく分からない相槌を打つと、それきり黙った。
そして、午後一時十分。
「行こうか」
「うん」
僕達は起き上がり、行動を開始する。
「さてと」
屋上から校内に戻った僕達は、まずは三階にある美術室に向かっ

た。
特別教室が使われるのはこの時間の三年生の美術と、次の時間の一年生の音楽。一年生は午前中に見終えているので、実質的に特別教室の確認はこれで終わりだと思っていいだろう。
僕達はそーっと、美術室の中を覗き込む。中ではちょうど担当の柊先生（女）が今日の課題の説明をしている。
「えー、今日は皆さんに好きな人の裸を描いてもらおうと思いまーす！」
「はぁ！？」
「何言ってんだ、このエロ教師！」
「えー、じゃあ今から脱ぐので、私をモデルに裸婦画を描いてくださーい！」
「おお！　ぜひお願いし……ぐは！」
「このスケベ！　馬鹿な事言ってないで早く先生を止めなさい！」
「うわぁ、先生、本当に脱ぎ始めたぞ！」
「キャー！　誰か止めてー！」
美術室が罵声と怒号で包まれる中、
「……反応は？」
「……ないアル。……これって何の授業アルカ？」
「こんな大人になるなって言う道徳の授業だ。次行こう、次」
「神」がいないことを確認して、その場を去った。
続いて、三年生教室。まずは三年二組から。
「どう？」
「隠れて漫画読んでいる奴しかいないアル」
「そいつは受験生失格だ。次」
三年三組。
「こっちはどう？」
「隠れてゲームで通信対戦してる奴しかいないアル」
「そいつも受験生失格だ。次」
三年四組

「いそう？」
「隠れて白い粉吸ってる奴しかいないアル」
「そいつは人間失格だ。通報しなくていいのかな……まあいいや、次」
三年五組
「いる？」
「スカートの中に何か太いおもちゃ入れてる女がいるアル」
「見なかった事にしよう。次」
三年六組。
「いた？」
「何か天井から半透明な首括った女がぶら下がっているアル」
「いない、そんなものはいない。次」
そうして十組まで見ていったが、いい反応は得られなかった。
残りは僕のクラスも含む二年生……という事で二階、二年生教室前。
まず二年一組。
「美人の先生がいるアル」
「いや、先生はいいから。いるの？」
「いないアル」
「あっそ」
次、二年二組。
「厚化粧のおばさんがいるアル」
「本人はあれでいいと思っているんだよ」
次、二年三組。
「幸薄そうなサラリーマンがいるアル」
「いや、先生だから。幸薄いのは否定しないけど」
僕のクラスの二年四組と二年五組は見たらしいので、次は二年六組。
「生え際が怪しいおっさんがいるアル」
「気にしてるんだから、黙っててあげなよ」

次、二年七組。
残りの教室はさっき見たそうなので、この教室で最後である。
「どう？」
「ヤクザの組長がいるアル」
「あれでも更生したんだよ……で、ここにもいないんだね？」
「うん」
「……」
全ての教室を見終わった僕達はもう一度屋上に行き、入り口の上に上ると、そこでがっくりと項垂(うなだ)れた。
「はぁ……」
「そんな気を落とすなアル！」
「君はもうちょっと気を落とそうね」
ポジティブだな、この娘は。
だが、気を落とすなと言うのは無理があるだろう。
「……」
太陽は朱色に染まり、山間に沈み始めている。
僕達は結局、一日中探し回った挙句、何の収穫もなかったのだ。
「神」は巧みに社会に紛れるとは頭では分かっていたが、こうも見つからないとさすがにへこむ。
「何で見つからないんだろう？　人に擬態しているんじゃないのかな？」
「いや、「神」本来の姿でこの中に隠れるのは無理があるネ」
「じゃあ、校舎の外のどっかに隠れてるとか？」
「それもなさそうアル。一応校舎を回りながら外の様子も探って他アルガ、そんな気配はなかったアル」
「はぁ……じゃあ何処にいるのかね！」
僕は勢いをつけて起き上がると下に下り、屋上の金網に寄り掛かった。
下を見ると、すでに部活動を始めている生徒がいる。つまり、僕は完全に一日サボってしまった訳だ。

「仕方ない、今日は引き上げるか……」
夕日を背に、僕はひとりごちる。
「えー、調査は始まったばかりじゃないアルか！」
「君、今までの行動覚えてる？」
学校サボって上に夕方まで探したんだから、充分だろう。正直、もう疲れた。
「だっていなかったじゃないか。気のせいだったんじゃないの？」
「むー！」
アリューはまだ納得がいかないようだったが、いるのかどうかも分からないものに、これ以上は付き合いきれない。
「それに僕は早退って名目で授業を抜け出してきたんだし、これ以上学校にはいられないよ」
「……じゃあもう「神」探しはしてくれないアルか」
途端にアリューが寂しそうな表情になった。
……やめて、そんな小動物みたいな目で見るのは。
「って言われてもなぁ……おっ」
アリューの視線アピールから逃れるために下を見た僕の視界に、グラウンドを走っている陸上部のユニフォームを着た静奈の姿が映る。確か近々陸上の大会があるんだっけな。
「あ！」
グラウンドを走っている静奈に、同じくグラウンドで練習をしていたサッカー部のボールが当たり、転倒した。ボールをぶつけたサッカー部員や、他の陸上部員達が駆け寄っていく。
「……」
部員に見守られる中、静奈は自分で立って歩き出した。どうやら軽い怪我で済んだようである。
僕はほっと胸を撫で下ろした。
「お、朝主人をぶん殴ってた女子じゃないか」
「せめて幼馴染って言ってくれるかな」
「お？　何処かに行くみたいアルヨ？」

アリューが指差す先で、静奈が一人で校内に入っていくのが見える。
「保健室に行くんだよ。怪我はしたみたいだし」
「ふーん」
「でも、あの保健室、クヌギの木がそばにあるから樹液臭いんだよね。夜窓開けると虫入ってくるし……」
そこまで言って、僕の言葉は止まった。
心配そうに僕の顔を見てくるアリューを余所に、僕は自分の言った言葉を心の中で反復する。
“クヌギがそばにあるから樹液臭いんだよね”
“夜窓開けると虫入ってくるし”
『“「虫」が入ってくるし”』
「！」
僕は保健室に向かって走った。

暗中模索（後書き）

次回、結構シリアスなお話になりマス。それにしてもいきなりハブられましタネ、静奈。展開上仕方ないとは言エ、彼女から恨まれるような気がしマス。ではデハ、次回をお楽しミニ。

悪戦苦闘（前書き）

今回は全部シリアスな話デス。いつもとはノリが違いまスガ、面白いと思うのでどうぞお楽しみくだサイ。

悪戦苦闘

太陽が山間（やまあい）に沈み、星が夜空に輝き始める頃、僕は保健室に向かって必死に階段を駆け下りていた。
「はぁ……はぁ……おっと！」
焦りと薄暗さのせいで、階段を踏み外しそうになる。だが、今の僕には証明を点ける余裕もない。
「主人（あると）！」
と、追いかけてきたアリューが、後ろから話しかけてきた。
「急にどうしたアル！」
「保健室だ！」
「え？」
「「神（アバター）」はおそらく保健室にいる！」
クヌギの樹液臭くて、夜になれば虫が中に入ってくる。これだけの条件が揃っていれば、「神」がいてもおかしくない。
保健室に行ってしまうからと後回しにしておいて忘れてしまうとは、僕は何て馬鹿なんだ！
「クヌギの樹液には多くの昆虫が集まる……ただ、昼間目立った行動をしていないという事は、相手はおそらく夜行性の昆虫だ」
「でも、それだってかなりの種類がいるアル。実際に見てみないと判別はできないアル」
「分かってる！」
「……」
僕の怒鳴り声に、後ろを走るアリューが黙る。
「……ごめん」
悪いのは僕なのだ。
先生に見つかるとか、怒られるとか、そんな体面など気にせず、もっと真剣に探していれば。
……いや、今は後悔している場合じゃない。

急がなければ静奈が……。
「アリュー、僕に力を貸してくれるかい？」
「ムフフ、私は初めからそのつもりだったアルヨー！」
「じゃあ、行こう！」
「うん！」
僕とアリューは保健室に向けて、一直線に駆け下りた。
「はあ、はあ……」
保健室は校舎の東の端、すなわちグラウンドのクヌギ林の近くにある。校舎の中央に位置する屋上の出入り口からだとかなり遠い。
このままだと……。
「きゃあああああああああああ！」
「！」
空気を切り裂くような、大きな悲鳴が聞こえた。
「静奈ぁぁあああああああ！」
僕は必死に走り続ける。
そして、ようやく見えた保健室のドアを開けると、そこには、
「ぐぐっ……」
静奈を片手で持ち上げ、首を絞めつけている保険の牡丹（ぼたん）先生がいた。その手には、華奢な体つきをした先生に不釣り合いな、巨大なチェーンソーが握られている。という事は、本物の牡丹先生はもう……。
「静奈……」
良かった、まだ生きている。
……ん？
“まだ生きている”？
「！」
僕達の存在に気付いたのか、牡丹先生……いや、牡丹先生の姿をした「神」がこっちに振り向いた。
「おやおや、見つかっちゃったか。やっぱり悲鳴上げられないように喉を潰しておくんだったかな」

「ぐあぁあっ！」
「神」が歪な笑顔を浮かべながら、さらに静奈の首を締め上げる。
「やめろ！　何でこんな事を……」
そうだ、何故苦しめる必要があるんだ？
捕食するのが目的なら静奈はもう食べられていてもおかしくないのに、今の「神」はただ静奈を苦しめているようにしか見えない。
「神」の戦闘能力なら、即座に捕食できるというのに……。
「はははははははは！」
そんな僕の心中でも察したのか、「神」が高笑いを上げた。
「何故苦しめるような真似をするのかって？　決まっているだろう、「恐怖心」を募らせるためだよ」
「恐怖心？」
「そう、私達は相手の「感情」をエネルギーにしているのだよ」
「な……」
「おや？　後ろの「欠陥品」から何も聞いていないのか？」
「……！」
僕は「神」に促されるまま後ろを振り返る。
「……」
アリューは僕と目が合うと、気まずそうに目を逸らした。
「くはははははははははは！」
そんなアリューを見た「神」は心底面白そうに笑う。
「何だ、何も教えていないのか。まあいい、サービスで教えてやるよ。私達は精神生命体。だから、私達の食料も同じく相手の精神的なエネルギー、つまり「感情」なのさ。特に「恐怖」「憎悪」等の「負の感情」が特に好物でな、それを得るには相手を苦しめ、痛めつけるのが手っ取り早い、そういう事だ。だが、味方同士でそんな事をする訳にはいかない。そこで、我々はそれを他の世界に求めた。他の世界を侵略し、恐怖を蔓延させ食らい尽くして、また別の世界を侵略する。それが我々『デルタ界』のライフサイクルだ。あと相手の肉体ごと食うのは、憑依した肉体を保つため、要は物のついで

って事だ。分かったか？」
「な……な……」
そ、そんな事のために……。
「そんな勝手な事のために！」
「そうだ、この女を返してほしいんだったな。ほら！」
「神」が乱暴に静奈を僕に投げつけてきた。
「うわっと！」
僕はよろめきながらも、辛うじて静奈を受け止める。
「静奈、大丈夫！？」
「げほ、げほっ！」
静奈は咳き込んではいるが、大きな怪我は見当たらなかった。
『話は終わりだ。ここは居心地がよかったからもう少しいたかったが、バレたのなら仕方ない。お前らにはこの学校ごと消えてもらう』
言い終えると同時に、「神」の体に変化し始める。
「コォォオオオオオオオオオオオ！」
そして、咆哮と共に「神」がその本性を現した。
全身が蒼い装甲で覆われた巨大なヒューマノイドタイプの体型で、頭には二本のギザギザのついた角と暗視スコープを思わせる赤い目、背中には甲虫の様な翅があり、腰からは長い尻尾が生えていて、角の分を含めるとゆうに十メートルを超える。その胸の真ん中には、昼間の「神」と同様の赤く光る光球があった。
さらに手に持っていたチェーンソーも変化し、二つのチェーンソーの後ろの部分を接合したデュアルソーになっている。刃の長さだけでも五メートル以上、全体の長さは自分の身の丈すらも超すほどの大きさで、おそらく人間など一刀両断されてしまうだろう。
――――――『#004：Avatar（アバター）・The（ザ）・Beryllium（ベリリウム）』――――――
「コォォオオオオオオオオオオオオ！」

「神」が今や狭すぎる保健室を打ち壊し、不気味な声を上げた。
そして、その巨大なチェーンソーを僕と静奈に向けて振り下ろす。
「はっ！」
それを戦闘モードになったアリューのデュアルランサーが受け止めた。チェーンソーがぶつかる事で大量の火花が散り、その光で周囲一帯が明るくなる。
「早く逃げるアル！　こいつが憑依しているのは「ノコギリクワガタ」。今まで相手にしてきた奴とは桁違いアル！　私でも勝てるかどうか……だから早く！」
僕らの方を見ずにアリューが叫んだ。
あの焦り方は尋常ではない。それほどの相手という事だ。
なら僕がここにいては邪魔になる……でも。
「でも……！」
「……黙っていたのは謝るアル。でも、今は私を信じてほしいアル。だから早くその人を連れて逃げるアル！」
この娘は……。
「分かった。……ごめん」
僕は静奈を抱えて走り出す。
何て情けない……僕はあまりにも無力だ。
だが、今の僕にはこうするしかない。
「……ここなら、とりあえずは大丈夫か」
僕は学校の裏にある公園のベンチに寝かせた。静奈はさっきのショックのせいか、気絶している。
と、その時。
ゴバァアアアアン！
学校の方から大きな爆発が起きた。それに伴い、大量の爆炎が星空を黒く染めていく。
「……やっぱり、ほっとけない！」
僕は静奈を置いて、爆炎の立ち込める学校に走り出した。
「はぁ……はぁ……」

ドォォン！　ドォォォオオン！
学校に向かう間も、何度も爆発は続く。
そして、僕が学校のグラウンドに着いた時、そこでは、
「コォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」
「はぁぁあああああああああああああああああああああああああああ！」
アリューと「神」との壮絶な戦いが繰り広げられていた。彼女の周りでは、逃げ遅れた生徒達が戦々恐々と逃げ回っている。
「コォォオオオオオオオオオ！」
「うわぁっと！」
アリューがチェーンソーの刃に弾かれ、空中に放り出された。
これがチェーンソーの一番怖い所である。チェーンソーの刃は常に高速で回転しているため、普通の武器で接触すると刃に弾き飛ばされてしまうのだ。それは防御する時にも言える事。
つまり、普通にチェーンソーと相対すると一方的にやられてしまうのである。
「はあぁ！」
放り投げられたアリューは宙返りしながら着地して、再度飛びかかる。そして今度はチェーンソーのエンジン部分に狙いを付けて牙突を放った。
うまい。チェーンソーはエンジンを止めればただの大きな機械の塊だ。そうなればエンジンが付いている分他の武器よりも遅くなるので、一気に有利に立てる。
「！」
だが、その攻撃に対して「神」は驚くべき対処をしてきた。なんと、槍が当たる直前にチェーンソーの接合部を取り外したのである。
「な……何だ、あれは？」
見ると、チェーンソーの接合部が黒い電流の様な物で繋がれて、それを槍の矛先に絡めて勢いを殺し、そのまま槍ごとアリューを地面に叩きつける。
あのチェーンソー、着脱が可能だったのか！

「かはっ……」
アリューは息を絞り出したような声を上げた。
「ホォッホォッホォッ！」
「神」はそんなアリューを嘲笑いながら、逃げ遅れた生徒達の方へ向かう。
「うわぁあああああ！」
「きゃあぁぁあああああ！」
生徒達が悲鳴を上げて、やたらめったらに逃げ回った。
「コォォオオオオオオオオオオオオ！」
そんな哀れな生徒達に、「神」のチェーンソーが振り下ろされる。
「はぁぁあ！」
その攻撃をアリューがすんでの所で受け止めた。
「早く逃げるアル！」
「は、はいぃ！」
「うあああ！」
逃げていく生徒を見送ったアリューは安堵の表情を浮かべたが、休む暇もなくチェーンソーを両手に持ちかえた「神」の攻撃がアリューを襲う。
アリューはそれをバックステップでかわし、チェーンソーの刃が地面を抉り取った。
「くっ……！」
アリューはそのまま「神」と距離を取ろうと後ろに下がる。
しかし「神」がそれを許すはずもなかった。
「コォォオオオオ！」
「神」の右手に持っているチェーンソーが変形し始める。刃の部分がぐにゃりと曲がり、チェーンソーの接合部に刃の先端部が融合した。その形は、インドで使われていた投擲武器「チャクラム」にそっくりである。
「コォォォオオオオオオオオオオ！」
「神」はチャクラム（もう一つのチェーンソーの接合部分と黒い

電流で繋がっているので、形としてはヨーヨーに見える）に変化したそれをアリューに向かって放り投げた。
「くっ！」
バックステップの最中なので避ける事ができないアリューは、それを槍で受け止めようと身構える。
「駄目だ！　避けろ！」
「がっ！」
だが、僕の言葉は間に合わずチャクラムはアリューの槍に当たり、槍ごとアリューを弾き飛ばした。
チャクラムに見えても、あれは変形したチェーンソー、当たれば当然弾き飛ばされてしまう。
「コォォォオオオオオオオオオオオオ！」
「神」はチャクラムを引き戻すと、今度は繋ぎ目の黒い電流を放電してきた。無数の黒い稲妻が一斉にアリューに襲いかかる。
「！」
弾き飛ばされているアリューにそれを防ぐ術などある訳もなく全て直撃し、そのまま僕のすぐ隣に叩きつけられた。
「がはっ！」
アリューが苦しそうな声を上げ、口から大量の血を吐き出す。そしてそのまま気を失ってしまった。
『口ほどにもないな』
そんな僕とアリューの前に「神」が降り立つ。
「アリュー……」
僕はアリューを見た。
身体中傷だらけで出血している上、さっきの稲妻のせいで全身を火傷している。
「どうして……」
どうしてこうなった……。
どうしてそうさせてしまった！
どうしてこうなる事を防げなかった！

「どうして！」
どうして僕は……こんなに中途半端で、無力なんだ。
『フハハハハハハ！　逃げていなかったのか。愚かだな』
そんな僕を見た「神」が嘲笑う。
『この世は弱肉強食。所詮貴様らのようなゴミに生きる価値などないのだ。今すぐこの私が殺してやる！』
「神」が用済みとばかりにチェーンソーを振り上げた。二つの刃が僕とアリューに迫る。
だが僕に何ができる？
僕に何が守れる？
僕は無力なんだ。
だけど……だけど、僕は……“俺”は。
「ハァ？　ふざけんなよ、バァカ！」

悪戦苦闘（後書き）

次回、主人公がすごい事になりマス。同時に、この物語の意味が分かりマス。ではデハ、次回をお楽しみに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1377ba/

ゴキげんＮＡＮＡＭＥ！

2012年1月14日22時49分発行